

人口問題研究

第二卷 第一號

研究

熱帯の風土的條件と

移民適格性の諸問題

(一)

小山 榮三

- 第一章 生活空間の擴大と人口配置
- 第二章 熱帯移民としての日本民族の適格性
- 第三章 日本人の熱帯移民
- 第四章 アジア人の熱帯移民
- 第五章 白色人種の熱帯移民
- 第六章 開拓移住の基本問題
- 第七章 熱帯移民としての白人の失敗原因
- 第八章 熱帯の氣候概念と其の生活形態
- 第九章 熱帯風土への適應條件

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

第一章 生活空間の擴大と人口配置

東亞共榮圏の確立は日本の海外發展政策に於て否定すべき過去と肯定すべき未來とを決する重要な任務を我々に負はしめてゐる。

この問題は現實な諸條件の下では、一方では軍事的勢力の延長と強度によつて規定せられ、他方では、文化、經濟、植民を通じた、その内部の諸民族と日本民族との結合紐帶の鞏化によつて解決される。

近衛内閣の基本國策要綱たる「大東亞共榮圏の確立」は日本民族の生活空間の擴大を意味するものであつて、それは「日滿支を一環とし大東亞を包容して自給自足の共榮圏を確立し、その圏内における資源に基きて國防經濟の自立性を確保し」更に「皇國の經濟をしてより高く、より廣く、より強きものたらしめ、これによつて東亞諸民族の生活向上を齎し、各々其所を得しめる如く指導しなければならぬ」ことを明示した。即ち『より高く』とは國民の持つ生活力に一層高度の生産性を持たしめることであり、『より廣く』とは經濟相互依存圏を日滿支より更に大東亞に擴大して鞏固なる共榮圏を確立することであり、『より強く』とは皇國の經濟が外國に依存する程度を最小限にしていかなる事態に當面しても微動だにせざる底力を保持することである。かくのごとく皇國の經濟をして高く廣く強きものたらしめるには全國民の總力を結集して強固なる意志をもつて内においては革新

に伴ふ苦惱を克服するとともに外より來るいかなる壓迫脅威をもこれを排撃し、今後およそ十年にして日本を指導力の中心とする新たな東亞經濟の秩序を完成しなくてはならぬ。この秩序の中においてこそ滿洲、支那はもとより東亞諸國の經濟はその輝しい向上發展を所期し得るのである。」

而してこの「大東亞共榮圈」の確立はそれらの圈内の諸民族の指導勢力たる日本と、それを阻止しやうとする大西洋の反對諸勢力（英、米及びその傀儡たる蔣政權）との對立相剋を必然たらしめ、そこに熾烈な鬭争の展開を見やうとしてゐる。然しそれは如何困難であるとしても彼等の敵性妄動を排除し、この危機を克服突破しなければならぬ。そうせざる限り日本はその對外的經綸を全く實施し得ざるばかりではなく、遂には國際的發言權をさへ奪はれ、遂には絶海の孤島に窒息せしめられてしまふのである。

「アジアをアジア人の手に」とりかへすこと——我々は既に「血」を以てこの世界史的使命を果しつゝある。我々は更に東亞共榮圈の指導的位置を永久に維持するために現實な我等の「血」をそれらの「土地」に結び付けなければならぬ。八紘一宇、民族協和の理想を實現するために思想堅實にして身體強健な日本人を多數共榮圈内の諸國に入植せしめその勤勞奉公の實踐を通じて接觸民族に範を示し、原住民の指導的中核體として、その後繼者を永續發展せしめなければならぬ。その爲め如何なる準備と手續とをとるべきかを豫め考慮するべき義務を我々は課せられてゐるのである。而して日本の企圖する大東亞共榮圈の輪廓はハウスホッフアの云ふ曳裂弧の大島帝國の建設に外ならず、その建設の基礎は實に人種的血縁及び空間の近接性にあるのである。「ここでは第一に人種政治的敎訓に富んだ二箇の現象を取扱はねばならない。即ち、ベルツが最もよく研究した日本人の人

種形象——地政治學的に最も純粹に太平洋的な形成物としての——と、地政治學的に最も破壊され且つ最も活動的な南マレー人の人種形象である。マレー人問題はマレー・蒙古人にまで擴大し得るだらうか？如何にしても擴大せねばならぬものだらうか？だとすると全く比較を絶する豊かな自然空間の中に、驀進的速度をもつて發展するところの稀有な人種の統一性をもつた一三〇百萬の人間（一箇の近代的國家を中核とした——血縁的な數百萬の共存感に包まれた——一箇の共通支配の未來をもつた）がわれわれの眼前に現はれてくるし、共通利益によつて此の未來の發展に結ばれてゐる敵手たちは、現在においては二つのアングロサクソン帝國もフランスであり、そして恐らくはロシヤもまたそうであらう。

偉大な島勢力となつた國の早期の状態を見たリヒトホーフエンの不安に充ちた言葉が今われわれの前に現はれる。即ち印度と支那の獨立と共に、しかも兩者と密接な關連をもつて、高度な生活能力と優越せる海洋的勇氣をもつた、そして散在せる海洋遊牧民の中から形成されつゝある一箇の天才的な第三の生活形態の輪廓だ。即ち、千島列島からシンガポール、スマトラ、トンガにいたるマレー・蒙古人の曳裂弧の大島帝國の輪廓がそれだ。孫逸仙は大戦に際して日本が中歐の側に立つてゐたならば、アジアの自決と時を同じくして、かくの如き帝國が日本によつて現在創造されていなくてはならぬと述べてゐる。(Karl Haushofer: Geopolitik des Pazifischen Ozeans. 日本青年外交協會研究部譯「太平洋地政治學」上、一〇二頁)

共榮圈確立のための人口方策を論ずる場合、滿支は既に一應我國策によつて決定された開拓政策を實行しつゝある。従つて本篇に於ては主として南洋地域に重點を置き、其の風土的條件と人口現象を検討しやう。

東亞共榮圈の資源を以て永續的な自給自足のブロック經濟を完成するためには先づ資源開發のための技術及び投資が不可欠に必要であるがそれに對應して南方地域への植民即ち人間がその土地に植えられなければならないのである。

國際關係の急迫に伴ふ日本國家の戰時新體制への進展は人口の構成も亦戰時的に編成替へされなければならないことを要求した。軍需産業に於ける「生産擴充」の必要は都市に於ける失業者や、農村に於ける潜在的過剩人口の吸収をもつても足れりとせず、更に平和産業からの轉業者を編入しても尙ほ軍需産業及び生活資料生産部門のための勞働力の絶對的不足を來し、數年前まで農村の過剩人口が云々されてゐたにも拘らず現在に於ては逆に農村に於ける勞働力の不足が叫ばれてゐる。

嘗ての日本の移民問題は「過剩人口の解決策」としての移民であつた。之に反して現實の戰時體制の形態に於ける人口政策は大東亞共榮圈の確立に對應する勞働力の「培養」乃至「配置」を目指すものである。かくして「人口過少」の問題が現實的な課題として發生してきたのである。日本の大東亞共榮圈の確立のためには直接の軍事力、生産擴充のための勞働力以外に共榮圈確立の目的に對應した、全般的にして計畫的な海外に於ける邦人の龐大な量の「人口配置」が要求される。

然るに戰時經濟の強化は勞働力の低下、出生率の下向、集團移住のための内地人口の「奪略」等最も勞働力の増強を必要とし、人口増加を要求する時期に於て反つて人口減少への契機を強度化し、將來の國力後退性を結果する素因を醗酵しつつあるのである。この矛盾を如何にして解決し、悪化諸條件を克服し、共榮圈各地域に於ける指導力維持のための人的要素の

「配置」と「擴充」を急速に實現するかが現下の最も主要にして緊要な人口問題でなければならぬ。

一國の出生率の低下現象は文明諸國にとつて共通な經驗的法則とされてゐる。西部歐洲諸國に於ては二十世紀以來出生率、自然増加率が漸次低下してゐるが、この惰性が今後も繼續するものとすれば、近い將來に於て人口増加は停止し、終にはその民族の消滅が豫測されるに至つた。戰爭はなくとも我國に於ては、大正九年の人口千に付き三六・一九人の出生率を最高とし、昭和五年(三二・四)、同六年(三二・二)、同九年(三二・九)、同八年(三一・六)、同九年(三〇・〇)、同十年(三一・六)、同十一年(二九・九)、同十二年(三〇・六)、同十三年(二六・七)となつて漸減の傾向を示してゐる。

若しこの傾向が持續するならば上田博士の云はれる如く「日本では既に出生率は低下の傾向を現はしてゐるのであつて、吾人がそれを好むと否とに拘らず、早晩西洋諸國の如き状態」であり數量的に民族滅亡を懸念せざるを得ないのである。(小山榮三「現下に於ける民族人口政策と青年體位向上問題」青年指導。第五卷、九號、三四頁)

然るにこの經驗的法則を打破して、下向出生曲線の方向を上昇せしめる奇蹟を實現したものは實に獨逸であつた。フランスの潰滅は獨逸の優勢な軍事力によつたことは勿論であるが、其の國家的、民族的脆弱性の基礎は(一)人口量の問題 (二)人口組織の問題 (三)國家精神の問題の三點に於て甚しき劣性を示したからであると云はれてゐる。

今日本に直接し、敵性を持ち又は持ち得る支那の出生率は三八・〇(年出生數約一六、〇〇〇、〇〇〇人)であり、ロシアの出生率は四二・七(年出生數約六二〇、〇〇〇人)であり、合衆國の出生率は一六・六(年出生數約二、

〇〇〇、〇〇〇人)であり、更にこの人口基數はそれぞれ四四六、六〇七、〇一七人、一四七、〇二七、九一五人、一二三、七七五、〇四六人とするならば、それらの國のいづれよりも少ない六九、二五四、一四八の人口基數を有する日本の出生率が二九・九(年出生數約二、〇〇〇、〇〇〇人)であることは量的に見て將來これらの國家との對抗を困難ならしめるものである。

従つて我々は我が民族の生活空間の擴大を要求するとともに、少なくとも一億の人口基數を急速に獲得しなければならぬ。これは米、露、支に對抗し得る民族的根幹の最小數値である。

如何に現在の日本の生活空間が狭いかは朝鮮、臺灣、樺太、關東州、南洋を含んだ日本帝國の全面積(六八〇、九七七七方方)をもつてしてもポルネオ一島の面積(七四六、〇〇〇方方)に及ばず、スマトラ一島でさへ(面積四五四、九一九方方)日本内地(面積三八二、五五五方方)と臺灣(面積三三八三四方方)と樺太(面積三六、〇九〇方方)とを加へた廣さを有するのでも知られる。

日本はその人口數が世界總人口の約五%を占めてゐるに拘らず、朝鮮、臺灣、樺太を含めた總面積は世界陸地總面積の約〇・五%にしかならないのである。而して耕地一〇〇ヘクタール當り人口密度は實に一、一五二・六人であつて其の密度は世界第一であり第二位のオランダ(九〇五・二人)よりも實に二四七人多いのである。こゝに日本の國土資源に對する切實な人口壓力の問題が在る。而も日本に於ける耕地面積擴大の可能性は甚だ少く、その人口の増加の可能性と食糧生産の増加見積とを併せ考へると日本國土における消費の現状を維持するだけでも益々その食物輸入を必要とするであらう。又工業化によつてその人口を維持しやうとしても綿、石炭、

鐵、石油、ゴム等の重要資源の貧弱なことは日本の商工業國家としての發展を阻げ、國防の充實をさへ困難ならしめてゐるのである。

斯くして日本の増大しつゝある人口壓力を緩和し高度の國防國家の體制を整備するためには植民と工業の發展に必要な資源に容易に接近しうるやう努力することであつて大東亞共榮圈の確立は日本にとつて必須の運命なのである。

世界各國が植民地の獲得に努力してゐる動機は、現在では主に移住、貿易、原料資源の開発等——經濟的意味のものであるが然しそれは次のウーレルベルト博士の云ふ國力の構成要素のいづれかの強化を望む動機から出てゐるものである。(R. Gale Woolbert Royal Institute of International Affairs: The colonial Problem. P. 17)

- (1) 軍事力||兵力、原料資源、陸軍、海軍及び航空の施設、戰略的國境、海軍及び航空基地、交通線
- (2) 經濟力||産業組織、自給力、財政力
- (3) 聲望としての國威

而して大東亞共榮圈を日本の指導下に置くことはこれらの總ての要素の強化を實現することになるのである。

大東亞共榮圈は先づその資源的基礎に於て可及的に自給自足の目標を達成し得なければならぬ。資源的基礎に於ける強靱性の問題が共榮圈確立の必須の前提である。今東亞經濟懇談會の調査した東亞諸國に於ける主要原料生産量を檢すれば第一表の如くである。

第一表 東亞諸國に於ける主要原料生産量一覽表(年度一九三七年)

※印一九三六年
※印一九三八年

| 品目 | 國別 | 單位 | 日本 | 滿洲國 | 華北 | 華中華南 | 佛 | 印 | 泰 | 國 | 蘭 | 印 | 比 | 島 | 馬來及海峽植民地 |
|-----------|----|----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|---|---|---|---|---|---|-----------|
| 1 普通鋼 | 鋼 | 噸 | 4,590,000 | 1,260,000 | 3,000,000 | 1,501,760 | 3,341,500 | 2,600,000 | | | | | | | |
| 2 普通鋼塊 | 鋼 | 噸 | 4,590,000 | 1,260,000 | 3,000,000 | 1,501,760 | 3,341,500 | 2,600,000 | | | | | | | |
| 3 普通鐵 | 鐵 | 噸 | 2,390,000 | 650,000 | 1,500,000 | | | | | | | | | | |
| 4 鑄鐵 | 鐵 | 噸 | | | | | | | | | | | | | |
| 5 鑄石 | 石 | 噸 | 6,000,000 | 1,940,368 | 1,960,000 | 1,501,760 | 3,341,500 | 2,600,000 | | | | | | | 2,400,000 |
| 6 マンガン | 鑛 | 噸 | 6,770,000 | 218,000 | 3,300,000 | | | | | | | | | | 1,500,000 |
| 7 クロム | 鑛 | 噸 | | | | | | | | | | | | | 7,600,000 |
| 8 タングステン | 鑛 | 噸 | | | | | | | | | | | | | 1,100,000 |
| 9 銅 | 鑛 | 噸 | 7,660,000 | | 4,000,000 | | | | | | | | | | |
| 10 銅 | 鑛 | 噸 | | | | | | | | | | | | | |
| 11 鉛 | 鑛 | 噸 | 8,830,000 | | 3,000,000 | | | | | | | | | | 6,850,000 |
| 12 鉛 | 鑛 | 噸 | | | | | | | | | | | | | |
| 13 亜鉛 | 鑛 | 噸 | 3,900,000 | | 1,000,000 | | | | | | | | | | |
| 14 亜鉛 | 鑛 | 噸 | | | | | | | | | | | | | |
| 15 錫 | 鑛 | 噸 | 1,670,000 | | 1,100,000 | | | | | | | | | | |
| 16 錫 | 鑛 | 噸 | | | | | | | | | | | | | |
| 17 金 | 坨 | 噸 | 4,101,000 | 3,360,000 | | | | | | | | | | | |
| 18 銀 | 噸 | 噸 | 3,397,000 | 1,700,000 | | | | | | | | | | | |
| 19 白 | 金 | 噸 | 800,000 | | | | | | | | | | | | |
| 20 アンチモン | 鑛 | 噸 | 4,000,000 | | 1,700,000 | | | | | | | | | | |
| 21 水 | 銀 | 噸 | 1,100,000 | | 800,000 | | | | | | | | | | |
| 22 マグネサイト | 坨 | 噸 | | 1,640,000 | | | | | | | | | | | |
| 23 ニツケル | 坨 | 噸 | | | | | | | | | | | | | |
| 24 アルミニウム | 坨 | 噸 | 7,000,000 | | | | | | | | | | | | |

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

| | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|-----------|------------|-------------|------------|-------------|--------|--------|---------------------------|---|
| 52 | 鹽 | 噸 | 五,七四五 | 七,四〇〇,〇〇〇 | 六六,〇〇〇 | — | 一九三六〇 | 四,四〇五 | — | 四八九〇 | — |
| 53 | 硫 | 酸 | 〃 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 54 | キ | ニ | 一 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 55 | 米 | 千石 | 一〇七,一三三 | 三,一九九 | 一,二八六 | 三,四〇,一一 | 四八九五一 | 三,八三六 | 五,〇七七 | 二,〇〇,九〇〇 (皮共) 三,七,三六〇,〇〇〇 | — |
| 56 | 大 | 麥 | 〃 | 七 | 九,四五〇 | 六五,九七四 | — | — | — | — | — |
| 57 | 小 | 麥 | 〃 | 一,三〇一 | 四六,〇〇九 | 三三,七九〇 | — | — | — | — | — |
| 58 | 燕 | 麥 | 〃 | 二,四八三 | 七,二八 | 三,八七九 | — | — | — | — | — |
| 59 | 蜀 | 黍 | 百 | 一,五七六 | 二四,〇〇〇,〇〇〇 | 三九,一三〇,〇〇〇 | 六,〇〇〇,〇〇〇 | 四〇,〇〇〇 | 一〇,九三〇 | — | — |
| 60 | 高 | 粱 | 〃 | — | 四六八,〇〇〇,〇〇〇 | 四,一五〇,〇〇〇 | — | — | — | — | — |
| 61 | 大 | 豆 | 千 | 七,二九九※ | 四,六三 | ※千擔 三,三四八 | — | — | — | — | — |
| 62 | 茶 | 斤 | 五,三九一,三七五 | — | — | 三六,六三六,〇〇〇 | 一四〇,〇〇〇,〇〇〇 | — | — | — | — |
| 63 | 砂 | 糖 | 擔 | 一〇,〇三七,〇〇〇 | 二五八,八八四 | — | — | — | — | — | — |
| 64 | 煙 | 草 | 百 | 〃 | — | 一,二五,八七一 | — | — | — | — | — |
| 65 | 豚 | 毛 | 〃 | 〃 | — | 六,六〇〇 | — | — | — | — | — |
| 66 | 椰子 | 油 | 〃 | 一六,一一〇 | — | — | — | — | — | — | — |
| 67 | 椰子 | 油 | 〃 | 三三,五四〇 | — | 四,五,四九七 | — | — | — | — | — |
| 68 | 桐 | 油 | 〃 | 〃 | — | — | — | — | — | — | — |
| 69 | 加 | 里 | 施 | 〃 | 〃 | — | — | — | — | — | — |
| 70 | コ | ラ | 千圓 | 〃 | 〃 | — | — | — | — | — | — |

資料 ダイヤモンド統計年鑑十五年版

滿洲事情案内所「滿洲の物産」

滿鐵「滿洲經濟年報」十四年版

滿洲國國務院總務廳統計處「滿洲帝國國勢グラフ」康徳五年版

神戸商工會議所「重要物資需給の輪廓(滿支篇)」十五年五月

滿洲特産中央會「滿洲特産月報」

英文中華年鑑

第五次中國鑛業紀要

滿鐵「北支那」「中南支那」

Bulletin of Philippine Statistics 1938

Indisch Verlay 1937

Annuaire Statistique de l'Indochine 1937

Statistical Year Book of Kingdom Siam 1936

Malayan year Book 1938

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

大東亞共榮圈内に於て生産される錫、タンングステン、アンチモニー、ゴム、生絲、米、茶、コブラ、大豆、規那、マニラ麻、樟腦等は世界的生産物であり、又石油、石炭、鐵礦等の産出額は世界の總産額に於て占める比率を大ではないが、我國の米國依存性を脱却し得るだけの充分な生産量は存するのである。而して當面の問題は、この大東亞共榮圈内の物資の統計的數量や地理的分布ではなく、これらの諸國が如何に日本に政治經濟的關係に於て結びつくかと云ふことである。

不幸にして現在までの日本の南方地域に及ぼす經濟的浸透力は微弱である。この過去の怠慢を軍事力によつて急速に正常化しやうとするのが現在の日本の南方政策である。

而して共榮圈の確立を持続的に建設的にするためには、經濟的開發の諸方策に呼應して南洋各地への血縁的結合紐帶即ち日本民族の人口的配置が考へられなければならない。滿洲開拓と同時に熱帯植民が實現されなければならないのである。即ち共榮圈内に不動的足場を持つためには土に民を植へなければならぬ。そしてその定着性とその原住民との接觸性によつて邦人指導者と土民大衆とは信頼によつて結び付けられるのである。現在南洋共榮圈内に居住してゐる邦人の數は第二表の示す如く歐米人、支那人に比して甚だ少ないのである。従つて大東亞共榮圈確立のためには歐米人、支那人等の阻碍勢力に對抗しうるだけの南洋への植民が切實に要請されるのである。

第二表 共榮圈内の南洋地域の民族的人口構成

| 面積 (方里) | 人口 | | | |
|------------|-------|-----|----------|---------|
| | 地 域 | 土 民 | 白 人 | 支那人 |
| 二、四〇三、四六 | 蘭領東印度 | 三三 | 五、三三六、〇七 | 二、四〇、四七 |
| 一、三〇三、七 | 英領マレー | 三 | 二、三三三、〇〇 | 三三、三三 |
| | | 密度 | 土 民 | 白 人 |
| | | | 支那人 | 日本人 |
| | | | 六、九六 | 一、三三三、四 |
| | | | 一、八元、三七 | 五、九六 |

| | | | | | | |
|--------|--------|----|-----------|-------|---------|-------|
| 二九六、九五 | フィリッピン | 四五 | 一三、六五、〇〇 | 一九、六五 | 七、六四、五六 | 二五、七六 |
| 五三、四七 | 泰 國 | 三三 | 一、四四、四四、九 | 一、九〇 | 四、四三、七四 | 五三 |
| 七〇、四〇 | 佛領印度支那 | 三三 | 三、九八、六〇 | 三、二四 | 三、六〇、〇〇 | 二、四 |
| 九四、七六 | 北ボルネオ | 八 | 八、三三、二 | 三、三 | 四、七九 | 一、四九 |
| 二四、六九 | ニューギニア | 二 | 五、四八、二九 | 三、九 | 一、六五 | 三、六 |

第二章 熱帯移民としての日本民族の適格性

日本民族が熱帯植民者として適格であることは先づ其の民族構成と種族史が示してゐるところである。

日本の人種系統を最初に研究したデーニツツ(一八七五年)は「日本民族はマレー族と蒙古族との混合種族であり、而も蒙古族には二種あつて、その一つはアイヌだと云つてゐる。次に最も詳細に日本人の人種構成を研究したのはベルツであつて、彼は日本人構成要素として (一)アイヌ (二)滿洲・朝鮮人 (三)真正蒙古人とマレー蒙古人を數へてゐる。ベルツの説を祖述したシュルツに依れば日本人の特異性はマレー血液の混入により最もよく説明される。航海に巧なマレー人は最初南方の島嶼に止まり、その地の住民並びに朝鮮からきた移民に混合し、此の南部で政治的進歩が始まつたとするのは全く想像し得ない事ではないとしてゐる。(小山榮三「人種學概論」三一四頁)

まことに生活様式の基本形態たる衣、食、住——禪、腰卷の熱帯式衣服、米に對する執着、天地根天作を基とした家屋構造等——の固有形式を現代になつても尙ほ日本民族が保持して捨て得ないのはこれらの熱帯的要素が如何に根強く日本人の生活を支配してゐるかを示すものである。日本人の熱帯適格性を最も明瞭に説いてゐるのはトムソンである。

「日本人の人種的構成は今や決して以前の様に不明確ではない。その中にはマレー人種の血が多分に流れてゐることを信ずべき十分の理由があ

る。多數の人類學者がかゝる見解を抱いてゐる其の理由は、こゝに詳細する限りでない。然しその身長・色・相貌の大部分は確かにマレー系を暗示してゐる。マレー種たることのもつと有力な證據は家屋・舟・其他諸種の日用品多くの風習及傳統竝に農業及飲食の様式等に現はれてゐる。若し日本人がマレー人の血を多分にもつてゐるとすれば、彼等が果してよく北部地方で成功し得るかは疑問として差支無い。マレー人は熱帯民族で昔からその通りであつた。彼等は暑い氣候に應化して其の生活法を心得てゐる。ジャヴァにおいて見る如く、衛生法は大して注意するでもなしに彼等がよくかゝる氣候に應化することは、其の増殖の甚だ速かなのによつて證明されてゐる。

現に日本人は北方自國領——北海道——に植民するにさへ殆ど進展を示してゐない。この島は一九二五年人口密度一平方哩僅か七三で、之に比して日本國土は約五〇五であつた。北海道は一般に日本人の記述する所に依ると凍寒・不毛殆んど無價値の土地であると謂ふ。吾々から見れば北海道は日本の他の地方よりも、經濟的に一層良き機會を提供するもの様であるが、日本人はそれを好まないのので到底其處に繁榮しさうもない。北朝鮮及滿洲も亦寒い不毛の地として記述されてゐる。彼等は合衆國及カナダの大湖水地方と略々同緯度に在る。東サイベリヤに日本人を見ない主な理由の一は恐らく、彼等が寒嚴長期に互る冬を好まないと云ふことに歸因する。

是は又、日本人が滿洲植民において見るべき進展をなしてゐないこと理由を説明するであらう。一九二五年滿洲には關東租借地を含めて僅かに一八四、六二八の日本人があつた。租借地を除く滿洲には僅かに九七、一七八の日本人があつた。此地域には日本人農夫は殆ど絶無と云つても差支ない。在日日本人は殆ど皆商人の行政官・及び鑛山竝に鐵道の熟練工である。

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

換言すれば彼等は氣候に特に妨げられない職業に就いてゐる。斯く庇護された職業なら彼等もやつて行けるが、然し、彼等はこの凛烈な氣候を好まないのので其處に繁榮する見込は全然ない。然し乍ら日本人が朝鮮及滿洲に移住しなかつた理由として氣候だけを論じてはならぬ。彼等は戸外農場で鮮人及支那人と競争することは出来ぬ。そして是だけでも是等地方への彼等の移住を不可能ならしめるのである。それに彼等の適應しない氣候が加はると越え難い障害を構成する。

日本人は四十度以北のアジア移住に成功しなかつたのと反對に白人が全然野外作業の出来ない熱帯ハワイでは甚だ顯著な成功をおさめてゐる。日本人は男ばかりでなく女も子供も野外で働いて繁榮するやうである。彼等が繁榮する證據としては一九二〇年ハワイにおける二十歳乃至四十四歳の日本婦人千人につき五歳以下の小兒九六四もあつたと云ふ事實を引用することが出来る。一方日本では(一九一八年)二十歳乃至四十四歳の婦人千人につき同様の小兒僅かに七五四に過ぎなかつた。明かに日本人は生活標準のより低い民族との競争が餘り深刻でない是等の熱帯諸島ではよく繁榮するのである。勿論ハワイにおける健康條件は經濟條件と共に一般に良好ではあつたが然し婦人千人につき五歳以下の小兒の増加率二六・〇〇%であると云ふことは人口全體が大變健康状態に在ることを示すものである。

是は彼等が若し新氣候によく適應しなかつたなら到底あり得ないことである。ハワイにおける日本人の急激な増殖は確かに彼等がマレー人の血を多量に受け繼いでゐる結果であると考へねばならぬ。結局日本人は熱帯生活に良く適應せることを實證してゐるのである。(W. S. Thompson: Danger-spots in World population. 森田敏譯「人口過剰の對策」・五一頁)

人口の増加およびその有機的構成の向上と共に農業における勞働生産物も増加しなければならぬことは明白である。毎年高知縣の人口數だけ増加して行く龐大な人口を如何にして飼養して行くか。農業に於ける「生産性遞減の法則」は常に新たな耕作地に移り、經營面積を絶えず擴大する必要にせまられる。日本の面積が人口に比例して擴大されず、世界の領土分割が妥當でない限り我々は増加する人口の收容地を豫め自からの力によつて用意することは當然の論理的結論であると云はなければならぬ。

従つて在來の日本人の海外發展を阻止したものは主に政治的關係であつた。それらは日本人にとつて氣候的要素よりも重要な意義を持つものである。熱帶表南洋の日本人で現在政治的に、經濟的に獨立し、眞の満足な生活營んでゐるものは殆んどない。然しこれによつて日本内地人の熱帶不適應性と氣候的頹廢を結論するならばそれは皮層な見解たるを脱れない。内地人が臺灣に於て移民に成功しなかつたのは氣候的原因ではなくそこに既に支那系住民の高い人口壓力があつたからである。これは丁度白人が合衆國、カナダ、南阿、溫帶濠洲に定住し得たのは人口の少ない弱い原住民のところであり、熱帶に定住出来なかつたのは印度、ジャヴァ、ジャマイカ等の既住人口の密度が稠密で、原住民も生活力が強く、人口壓力も高いためであると同じ理由に基づくものである。そしてそこには人種吸收、混血、社會及び生物學的的不安定が起つた。

白人は疑もなく大部分の熱帶に於て困難な、不健康な環境に直面した。然しこの困難は主に氣候の一次的要因に基づくものか、寄生蟲病の如き二次的要因に基づくか明かでない。ソローキンは熱帶民族の退化は當然熱帶的墮落の理論を支持するものではない。何んとなれば退化民族は溫帶にも

亦見出すことが出来るからであると云つてゐる。(P. Sorokin: Contemporary sociological theories)

熱帶の或部分、南米、ハワイ等では白人が科學的方法によつて風土病を殲滅し、日本人は臺灣、内南洋で風土病を驅逐した。

然し印度、ジャヴァ、アフリカの如き熱帶地方に於ては生活程度が低く文化的發達度の低い土人、又は支那人の大密度があるので、少數の日本人移民又は滞在者だけでは指導權を握ることは困難である。従つて我々は常に大量な新鮮な大和民族の血液を注入することによつて彼等の精神的、肉體的頹廢も防止しなければならない。

第三章 日本人の熱帶移民

邦人の南方發展の歴史は安土桃山時代(十六世紀の後半)にその端を發しその後、豊臣時代より寛永の頃にかけて邦人の南洋進出は史上曠古の盛觀を呈し各地に日本人町を建設してゐた。このことは臺北帝大の岩生教授の研究に詳しい。「南洋全面に互る我が御朱印船の寄港貿易地には、固より乗組の船員や、便乗の商人等多數の我が同胞が年々渡航してゐるが、彼等の中には進んで、渡航地に踏み留まり、我が國民南方發展の第一線に立つて活躍する者も決して尠くなかつた。

御朱印船による南洋交通貿易の發展に伴ひ、之に便乗して南洋各地に渡航した我が國民の總人員も、亦従つて莫大な數に上つたであらうと推せられる。更に年々我が國の諸港より歸航する諸外國船に便乗した我が商人、外人に雇傭された船員、或は海外に於て外人の經營する諸種の業務に従事するため、或は外國の軍隊に参加せんとして渡航する同胞の數も亦決して尠少ではなかつたに相違ない。

當時南洋に渡航した我が諸船舶の乗組員數を、數例に就いて見るに、

| 年次 | 渡航先 | 乗組員數 |
|-------------|------|------|
| 文祿二年(一五九三) | 呂宋 | 一六〇人 |
| 同 年(同) | 同 | 三〇〇人 |
| 慶長一〇年(一六〇五) | マラツカ | 九〇人 |
| 元和三年(一六一七) | 福建 | 一〇〇人 |
| 同 六年(一六二〇) | 交趾 | 三〇〇人 |
| 寛永三年(一六二六) | 暹羅 | 三九四人 |
| 同 五年(一六二八) | 同 | 五七人 |
| 同 年(一六二八) | 高砂 | 二三五人 |

即ち、寛永五年暹羅渡航船の乗組員五七人と、同三年同地に渡航した御朱印船乗組員三九四人との間には、其の寡多に可なりの開きがあるが、右八例にて平均一隻二〇四・五人となる、慶長九年より元和二年まで、異國渡海御朱印船の總延數を一八三隻と見て、此の平均數に依れば、右十三年間に南洋方面に便乗渡航した我が同胞の延人員は三七四三・五人となり、元和三年から寛永十二年までの渡航船數を、前表により不完全ながら一四八隻とすれば、少くとも三〇二六六人となり、江戸時代初期鎖國まで、御朱印船による海外渡航延人員總數は十萬以上に上つたと推定しても差支へあるまい。其の中假に五分の人員が渡航先に踏留まつたとすれば、南洋各地に移住した同胞の數は五千人位となり、一割とすれば一萬人位となるが、御朱印船時代以前の渡航者、及び、幕府諸大名の切支丹宗彈壓が漸次重加するに伴ひ、信徒の海外に追放せられる者、或は自ら逃避する者も激増して、此等移住同胞の實數は一層増加したる可く、此等を通計し

て、當時南洋移住同胞數を七千乃至一萬と推計しても、決して過大なる見積りではあるまい。今彼等南洋渡航日本人の身分、職業、雇傭關係の諸相を縮觀するに、

A 日本人自から渡航したる者

- 一、海賊として渡航したる者 政府の禁壓により次第に變質消滅す
- 二、船員として渡航したる者 一、二、三の三者相兼ねる場合多し
- 三、商人として渡航したる者 一時的渡航者
- 四、失業者として渡航したる者 半永住的渡航者
- 五、追放切支丹として渡航したる者 外人の雇傭又は商人に轉ずる場合多し
- 六、其の他の渡航者

B 外人の雇傭人として渡航したる者

- 一、傳道者となれる者
- 二、官吏となれる者
- 三、商館員となれる者
- 四、船員となれる者
- 五、傭兵となれる者
- 六、勞働者となれる者
- 七、捕虜となれる者
- 八、奴隸となれる者
- 九、其の他の傭人となれる者

C 外國人との婚姻によりて渡航したる者

次に日本人の雇傭主たる諸國民は、元來南洋に土着して國を爲せる民族と、外部より南洋に渡來せし人種とに大別し得べく、其の各々は凡そ次の

如き人種である、即ち、

(A) 南洋土着人

(イ) 東京人 (ロ) 交趾人 (ハ) 東埔寨人 (ニ) 暹羅人

(B) 南洋外人

(イ) オランダ人 (ロ) ポルトガル人 (ハ) イスパニヤ人 (ニ) イギリス人 (ホ) イタリア人 (ヘ) 支那人

を列擧することが出来るが、是は當時南洋に於て活躍せし開化民族全部に互つてゐたと言つて宜し。

さて此等我が同胞の南洋に於ける居住の形態は、日本人のみ特定の地域に集團をなして一部落を形成する場合と、諸外國人の間に雜居して分散生活を営む場合とがあるが、前者を俗に日本町と呼び、フィリッピンのマニラ市東南郊のデイラオ(Diiao)とサン・ミゲル(San Miguel)、交趾のフェオ(Faio)・トゥーラン(Tourane)、東埔寨のピニャール(Pinhau)・ピンン・ペン(Phnom-penh)及び暹羅のアユチャ(Ayuthia)に在つた。外人間に分散雜居してゐる所は、殆んど南洋の全要地に互つてゐて、臺灣、澳門、東京を始め、モルツカ諸島のアンボイナ島(Amboina)、バンダ島(Banda)、テルナテ島(Ternate)、チードル島(Tidore)、マキアン島(Makian)、セレンブス島(Celebes)より、ボルネオ島(Borneo)の西南、スマトラ島(Sumatra)の東部、ジャバ島内のバタビヤ(Batavia)、とバンタン(Bantam)、マレイ半島内のマラツカ、大泥(Patani)、リゴール(六崑Ligor)等諸地にして、更に遠く印度にまで擴大してゐて、當時日本人の分布地域は、今日普通殆んど吾人の注意にも上つて來ない僻陬の地にまで及んでゐた。(岩生成「南洋日

本人町の研究」六頁)

然るに寛永十六年(一六三九年)徳川家光の發した鎖國令はこの輝しい發展途上にあつた我國民の海外發展の勢を一舉に閉息してしまひ、大東亞共榮圈の確立を二百年後らせたのである。

鎖國令廢止以後南洋に移民として渡航した最初のものは明治元年横濱駐在の布哇領事が日本政府との交渉によつて布哇の甘蔗園に送らせた百五十三名の契約移民であつた。其れ以來邦人の海外發展の潮流は東方に米國線と、南方に南洋線と、北方に大陸線の三方向に向つて流れた。そしてこの流は急速にその水量を増した。これに對して白人は最近になつてこの流れの流に對しても政治的な遮斷(移民制限令等)を試みたのである。今『拓務要覽』によつて其の沿革を摘記すれば次の如くである。

我國の海外發展は遠く足利時代に始まり、慶長の頃既に海外へ渡航した者もあつたことは前述の通りであるが、眞の移民と看做すべきものは明治以後のものである。

明治元年最初の移民として布哇へ渡航した百五十三名の移民は風俗習慣の差異、言語不通等で殆んど失敗に歸し、翌二年には四十名の歸國者を出した。其の後政府は移民の取扱を中止するに至つたが、明治十四年布哇王の來朝に次ぎ同十七年には日布渡航條約、日布勞働移民條約、航海條約の締結あり、其の結果同十八年再び九百五十一名が布哇へ渡航した。爾來布哇の有望なること漸次認められ逐年移民は増加し、明治二十七年迄には約三萬人が渡航した。政府も亦明治二十九年には移民保護法を制定して其の保護指導に當ることとなつた。當時の渡航者數を見るに、同三十一年には布哇へ一萬餘、カナダ、濠洲へ各一千、翌年には布哇へ二萬三千、北米へ三千、カナダへ一千七百、南米最初の移住者としてペルーへ七百九十、其

の他合計三萬一千餘人が渡航して居る。然るに布哇移民は殆んど契約移民であつた。

布哇が明治三十一年北米合衆國に併せられ、同三十三年には其の一州となるに及び、當時米國に於て勵行せられたる契約移民禁止が此の地にも適用せられた爲、移民のみならず移民會社も亦大打撃を蒙り續々解散の已むなきに至つた。然し其の殘存會社は中米、南米兩方面に進路を見出し、明治三十六、七年頃には比律賓へ二千二百人、ペルーへ一千三百餘人、メキシコへ一千二百餘人を送出した。

米、布に於ける契約移民の禁止は自由渡航者の増加となつた。明治三十七年頃より布哇在留の邦人は米本國へ續々轉航し、又内地よりも直接米大陸へ自由渡航する者多く、同三十九年には一千七百、同四十年には二千七百の渡航者あり、米國に於ける邦人は同三十五年には五千人に過ぎなかつたものが、六年後の同四十三年には九萬一千餘となり、毎年一萬人の増加を見る状態となつた。然るに明治四十年、日米間に所謂紳士協約が成立し、我國は自ら移民を制限せざるを得なくなつたのである。此の結果一時墨

國熱が高まり、同三十九年に五千人、同四十年に三千七百人が契約移民として渡つた。紳士協約の締結にも拘らず、米國に於ける排日運動は益々猛烈を極め、邦人の土地所有又は租借の禁止、市民權附與の制限等移民の目的は大半失はるゝに至つた。明治三十五年以來一萬人に近かつた布哇移民は、同四十一、二年に於ては三千人より二千人に減じ、米本國への入國は全く困難の状態となり、同四十一年には少數の自由渡航者があつたのみである。

此の政府の移民制限方針は其の他の方面にも現はれ、明治三十五年來毎年

一萬三、四千人より三萬六千人にも達した移民が同四十一、二年には、一萬人より四千人へと減少した。

然し此の時期に於て注目に價するものは邦人の南米進出である。明治四十一年最初の伯刺西爾移民として八百名の契約移民が、又ペルーには二千八百名の移民が渡航した。爾來漸次南米移民の増加を見、移民會社取扱の移民は大部分ペルー、伯刺西爾、亞爾然丁に渡航したのである。

政府の移民制限方針に依つて、明治四十二、三、四年と激減したる移民數も、大正元年頃より再び増加の趨勢に向ひ、翌二年には二萬人を越ゆるに至つた。其の後移民は常に一萬人に達したが、我國情に鑑み人口問題、食糧問題と關聯して盛んに海外發展が唱導せられ、移民制限方針は當然破棄されねばならなくなつた。そこで先づ政府は大正十年海外興業株式會社に補助費を交付して、海外移植民思想の宣傳普及と移植民の保護教養との施設を講せしめた。かくして伯刺西爾移民旺盛時代を現出するに至つた。

南洋契約移民は明治二十六年吉佐移民會社により鑛山労働者として濠洲ニューカレドニア島方面に送られたるものを以て嚆矢とし引續きクインスランド、フィジー等夫々數百名の契約移民が送出せられつゝあつたが、明治三十一年同島が米領となると共に契約移民禁止法が施行せられ、爲に當時亂立状態にあつた多數の移民會社はその營業の危機に直面し、何等かの手段によりその局面を打開すべき必要に迫られた。南洋地方はかかる事態の下に新なる移民送地として登場したのである。

南洋移民發展の基礎となつたものは明治三十六年、比律賓島のベンゲット

道路工事に雇傭せられたる勞働移民である。即ちマニラよりダワバンを経てバキオに到る道路工事の爲明治三六、七年の兩年に互り約三千名の勞働者が契約移民として渡航し幾多の苦難と犠牲の後三十八年道路工事を完成したが、同時に彼等は其の職を失ひ、旅費ある者は幸じて歸國し、旅費なき者は職を求めて比島各地を流浪するの止むなきに立ち至つた。此の時に當り比島開拓の先驅者太田恭三郎氏は此等同胞救済の爲ミンダナオ島ダバオ灣内のスペイン人所有地に失業者約百八十名を入植せしむる事に成功した。是即ち現今同地方に於ける邦人飛躍的發展の端緒である。

近代に於ける蘭領印度邦人發展の歴史は明治三十一年後藤實史氏がバタビヤに於て貿易商を營んだのに初る。その後漸次邦人の小賣商の進出を見たが此の時代に於て特筆すべきはスマラン、スラバヤ方面を根據として各地に活躍した、賣藥業者である。大正初期に至るまでは此の方面に於ける邦人は未だ著しき發展を示すに至らなかつたが、大正三年世界大戰の突發は邦人の商業的進出を量的竝に質的に強化した。即ち戰爭勃發と共に歐洲方面の物資の輸入杜絶したる爲此の間に日本商品の目覺しき進出を見、之に附隨して新に輸入業者、邦人大資本輸入商の進出を見た。大戰終了と共に歐洲諸國よりの商品輸入の復活及不況による購買力の減退等に依り本邦商品の輸入又激減し同時に大輸入業者は引揚げ又は解散し大いに其の數を減じたが、此等輸入業者の従業員店員等の多くは小輸入業者又は小賣業者に轉化し、小賣商は増加した。其の後昭和五、六年頃より低廉なる邦貨の輸入激増し之が取扱業者たる輸入商も増加した爲邦人商社の従業員として渡航する者漸次増加し其の數年々約四百名に達し、現在商業關係者は在留

邦人商業者の七割に達するに至つた。以上に依り明なる如く蘭領印度に於ける邦人の發展は其の當初より今日に至るまで専ら商業的であり此の點に於いて比律賓等とその趣を異にする。商業以外農業、鑛業、水産業等に從事する者もあるが此等は主として大資本を背景とする企業的小ものであり、此等拓植事業も又其の發展の形態としては商業者による小經營に其の端を有するものである。昭和八年入國令の改正、同十年非常時外國人勤勞條令の制定により邦人從業者の入國は著しく困難となり邦人の經濟的發展上尠からざる障礙を來しつゝある。

其他英領馬來、シヤム、佛領印度支那地方等への本邦人の渡航は、明治四十年代より大正の初期にかけて始まつたものである。此等の地域への邦人發展の經過も又商業的と云ふべく渡航者は商業從業者がその大部分であつた。然し華僑の優勢と民度の低位、政府の排外的政策等の爲今日に至るまで大なる發展を示して居ない。只英領馬來に於ては明治四十年頃より護謨企業擡頭し邦人の護謨企業の爲渡航する者相次ぎ、又護謨企業の活況は經濟生活を活潑ならしめ邦品の輸入も増加したる爲商業從業者としての渡航者も増加し商業界、栽培界に於ける活躍は相當見るべきものもあつたが大戦後の不況と數次に互る華僑の日貨排斥により非常なる苦境に陥つた。然し最近の我が輸出貿易の進展に伴ひ商業從業員の入國再び増加しつつある。

商業移民と相竝んで特記すべきものは漁業移民であつて、信すべき資料なき爲其の創始の年代を正確に知る事は不可能であるが稍々組織的に行はれるに至つたのは朝鮮、臺灣等の外地稼漁業が下火になつた頃、即ち大正の初期からであつて官廳の指導獎勵がこれに與つて力あつた。斯くて我が

漁業者は南支、比律賓群島、馬來半島よりスマトラ、ジャバ、セレベス等南洋到る所に進出するに至つたが、彼等は土人の幼稚なる原始的漁獲法に對し巧妙に優秀なる技術により沿岸漁族の捕獲に従事し漁業者として抜くべからざる勢力を形成するに至つた。

本邦移民の濠洲大陸發展は相當古い歴史を有し明治二十年代より三十年代にかけて渡航者も少くなかつた。當時クインズランド東岸は甘蔗栽培の初期であつた爲勞働の需要多く、此の方面に契約勞働者として渡航するものが多かつた。氣候馴化に強い本邦移民は北濠の酷熱の氣候によく耐へて活動を續け日本移民の新發展地として其の將來を期待せられて居つたのであるが、白濠主義の壓迫は明治三十五年遂に甘蔗耕作地の耕作移民を中絶せしむるに至つた。眞珠貝採取業者の渡航も明治二十年代に始まつたが技術優秀なる邦人は忽ちにして斯業に於ける勝利者となり不拔の地位を占むるに到つた。之が爲本邦人を拒否する時は濠洲の主要産業たる眞珠貝漁業の基礎を危くし英國商人に大打撃を與ふる事となる爲、耕作移民を禁止したる後に於ても眞珠貝採取業に従事する者のみは例外として其の入國を認め今日に到るまで依然邦人勞働者の活動が續けられ此等地方の眞珠貝漁業に絶體的地位を占めて居る。

既に述べた様に邦人契約移民の端緒となつたものは明治二十六年ニューカレドニア方面に送附せられた鑛業移民であり以後大正八年に至るまで引續きニツケル鑛山勞働者として、約三千五百餘名の邦人が送られたが其の後今日に至るまで邦人の渡航は杜絶えて居る。大正八年を境として邦人の渡航が杜絶した理由は明でないがフラン貨下落の爲生活困難となつた爲であると思はれる。尙ニューカレドニアは一九三〇年移民法を制定

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

し、勞働移民の入國を禁止したる爲、現在其の入國は困難なる事情にある。

英領北ボルネオの歴史は極めて新しく世に知られ初めてから僅に五十年位のものである。當領のタワオ地方は氣候風土等良好にして三十年前に邦人が渡航して以來拓かれた處で、現在日産農林業株式會社の麻園にマニラ麻栽培を目的とした家族移民が入植しつゝある。現在入植數百二家族六百二名に及んでゐる。

近年政府に於ても亦民間に於ても海外發展に對する諸種の施設を爲して其の奨勵指導を怠らず又一般國民にも海外思想普及し社會的、經濟的に難局に當つて我が國情と相俟つて移民の渡航も亦漸次増加の趨勢を辿るに至つた。

次に本邦内地人にして海外に在留する者の數を觀れば、在外邦人總數は百三十二萬一千三百九十五人であつて、此の數字中には官吏、會社員等も包含してゐるのであるが、大部分は海外移殖民と見て差支へない。是等の邦人を在留地別職業別に示すと第三表の通りである。

次に海外在住邦人の人口關係を見やう。嚴密な意味で一定地域の人口數を正確に知るには次の數式によつて計算されなければならない。

$$P_1 = P_0 + B + I - D - O$$

P_0 は考察される期間の初期の人口量、 P_1 は期間の終期 T_1 の人口量、 B は T_0 と T_1 の間の出生數、 D はその死亡數、 I は考察期間中の輸入移民數、 O は輸出移民數 (Dorothy Swaine Thomas: Research memorandum on migration differentials, P. 370)

然るにかゝる計算をなす統計は資料的現在まだ完備してゐないのであつ

人 職 業 別 人 口 (昭和十三年十月一日現在)

| 業 | 交 通 業 | | 公 務 自 由 業 | | 家 事 使 用 人 | | 其 他 ノ 有 業 者 | | 無 業 | | 從 屬 者 | | 番 號 | |
|---|--------|--------|-----------|--------|-----------|-------|-------------|--------|--------|---------|---------|---|-----|----|
| | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | | 女 |
| | 34,643 | 33,297 | 5,232 | 64,982 | 16,157 | 8,220 | 10,120 | 23,154 | 11,043 | 275,990 | 409,207 | — | — | 總 |
| | 30,784 | 29,615 | 5,231 | 60,696 | 15,011 | 3,955 | 7,276 | 16,775 | 9,161 | 109,524 | 189,635 | — | — | 1 |
| | 3 | 142 | — | 558 | 22 | 42 | 46 | 27 | — | 549 | 811 | — | — | 2 |
| | 3,491 | 2,536 | 1 | 2,606 | 920 | 3,637 | 2,447 | 5,268 | 1,743 | 77,607 | 108,096 | — | — | 3 |
| | 339 | 697 | — | 1,086 | 172 | 565 | 328 | 1,054 | 139 | 88,141 | 110,317 | — | — | 4 |
| | — | 2 | — | 20 | 1 | 44 | 53 | 1 | — | 24 | 96 | — | — | 5 |
| | 12 | 324 | — | 16 | 4 | 19 | 18 | 26 | — | 147 | 257 | — | — | 6 |
| | 3 | — | — | 27 | 2 | 7 | 6 | — | — | 44 | 92 | — | — | 1 |
| | 22,089 | 22,905 | 5,077 | 54,010 | 14,039 | 3,218 | 5,975 | 14,901 | 8,922 | 581,511 | 142,014 | — | — | 2 |
| | 8,267 | 6,530 | 153 | 5,744 | 841 | 547 | 989 | 1,265 | 218 | 20,884 | 33,909 | — | — | 3 |
| | 41 | 1 | — | 71 | 14 | 1 | 8 | 9 | 4 | 43 | 101 | — | — | 4 |
| | — | — | — | 21 | — | — | 1 | — | — | 4 | 8 | — | — | 5 |
| | 14 | 1 | — | 59 | 1 | 14 | 8 | — | — | 80 | 148 | — | — | 6 |
| | 14 | — | — | 8 | — | 23 | 5 | 1 | 1 | 68 | 20 | — | — | 7 |
| | 148 | 56 | 1 | 196 | 36 | 24 | 139 | 49 | 8 | 807 | 2,032 | — | — | 8 |
| | 1 | 1 | — | 19 | 6 | 1 | 10 | 1 | — | 202 | 418 | — | — | 9 |
| | — | — | — | 2 | 1 | — | — | — | — | 1 | 4 | — | — | 10 |
| | — | — | — | 9 | — | 1 | 4 | — | — | 8 | 10 | — | — | 11 |
| | — | — | — | 11 | — | — | — | — | — | 2 | 6 | — | — | 12 |
| | 49 | 3 | — | 168 | 27 | 8 | 22 | — | — | 170 | 486 | — | — | 13 |
| | 77 | 21 | — | 171 | 9 | 16 | 59 | 65 | 8 | 1,131 | 2,038 | — | — | 14 |
| | 93 | 97 | — | 199 | 62 | 95 | 50 | 484 | — | 4,549 | 8,327 | — | — | 15 |
| | 2 | — | — | — | — | — | — | — | — | 20 | 22 | — | — | 16 |
| | 12 | 324 | — | 16 | 4 | 19 | 18 | 26 | — | 147 | 257 | — | — | 17 |
| | 3,491 | 2,536 | 1 | 2,606 | 920 | 3,637 | 2,447 | 5,268 | 1,743 | 77,607 | 108,096 | — | — | 18 |
| | 2,533 | 1,273 | — | 1,812 | 457 | 1,401 | 438 | 1,566 | 344 | 32,098 | 42,334 | — | — | |
| | 958 | 1,263 | 1 | 794 | 463 | 2,236 | 2,009 | 3,702 | 1,339 | 45,509 | 65,762 | — | — | |
| | 284 | 179 | — | 123 | 40 | 72 | 132 | 687 | 137 | 6,595 | 9,209 | — | — | 19 |
| | 3 | 36 | — | 114 | 5 | 2 | 1 | 58 | — | 1,195 | 2,001 | — | — | 20 |
| | — | — | — | 1 | — | — | — | — | — | 1 | 4 | — | — | 21 |
| | — | 4 | — | 4 | — | 31 | — | 2 | — | 88 | 183 | — | — | 22 |
| | — | 2 | — | 4 | — | 1 | 1 | — | — | 45 | 100 | — | — | 23 |
| | — | 2 | — | 6 | 1 | — | 1 | 4 | — | 78 | 109 | — | — | 24 |
| | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 3 | 5 | — | — | 25 |
| | — | 22 | — | 119 | 23 | 142 | 22 | 109 | — | 6,471 | 8,188 | — | — | 26 |
| | — | 4 | — | 5 | — | 1 | — | 13 | — | 212 | 284 | — | — | 27 |
| | — | 6 | — | 23 | — | 9 | — | 1 | — | 114 | 245 | — | — | 28 |
| | 48 | 284 | — | 624 | 98 | 193 | 154 | 133 | 1 | 72,097 | 87,949 | — | — | 29 |
| | 3 | 140 | — | 54 | 2 | 109 | 13 | 43 | — | 1,051 | 1,786 | — | — | 30 |
| | — | 1 | — | 4 | — | 5 | 1 | 6 | 1 | 11 | 31 | — | — | 31 |
| | 1 | — | — | 7 | 3 | — | 3 | — | — | 180 | 218 | — | — | 32 |
| | 3 | 144 | — | 558 | 22 | 42 | 46 | 27 | — | 549 | 811 | — | — | 33 |
| | — | — | — | 6 | — | — | 3 | — | — | 5 | 33 | — | — | 34 |
| | — | — | — | 1 | — | — | 1 | — | — | 1 | 1 | — | — | 35 |
| | — | — | — | 6 | — | — | — | — | — | 5 | 22 | — | — | 36 |
| | — | 4 | — | 5 | 1 | 1 | 1 | 1 | — | 11 | 29 | — | — | 37 |
| | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 38 |
| | — | — | — | 2 | — | 1 | — | — | — | 2 | 11 | — | — | 39 |

人口問題研究 第二卷 第一號

第三表 海外在留本邦

| 地 方 | 總 數 | | 農 林 業 | | 水 産 業 | | 鑛 業 | | 工 業 | | 商 | |
|----------------------|-----------|---------|---------|--------|--------|-------|-----|--------|--------|--------|-------|--------|
| | 總 數 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 總 數 | 1,171,423 | 661,899 | 509,524 | 95,028 | 11,863 | 8,307 | 45 | 13,738 | 2,123 | 54,624 | 8,740 | 84,910 |
| 1 亞 細 亞 洲 | 642,325 | 366,381 | 275,944 | 25,018 | 9,150 | 3,700 | 34 | 13,407 | 2,123 | 43,557 | 7,174 | 50,282 |
| 2 歐 羅 巴 洲 | 25,077 | 24,191 | 886 | 15 | 1 | — | — | — | — | 49 | 3 | 311 |
| 3 北 亞 米 利 加 洲 | 264,771 | 120,664 | 144,107 | 29,220 | 2,535 | 2,585 | 10 | 239 | — | 5,755 | 1,421 | 14,654 |
| 4 南 亞 米 利 加 洲 | 237,037 | 135,314 | 101,723 | 40,759 | 177 | 400 | 1 | 19 | — | 4,875 | 161 | 9,386 |
| 5 亞 弗 利 加 洲 | 217 | 115 | 102 | 4 | — | 4 | 4 | — | — | 1 | 1 | 56 |
| 6 太 洋 洲 | 1,896 | 1,596 | 300 | 47 | 1 | 590 | — | — | — | 206 | 8 | 221 |
| 1 極 東 露 領 國 | 1,524 | 1,421 | 103 | — | — | — | — | 1,072 | — | — | — | 271 |
| 2 滿 洲 洲 | 42,947 | 276,476 | 216,471 | 18,158 | 9,116 | 204 | 30 | 14,195 | 12,072 | 36,744 | 6,735 | 33,104 |
| 3 中 華 民 國 | 105,334 | 60,702 | 44,632 | 74 | — | 317 | 3 | 182 | — | 4,700 | 252 | 10,259 |
| 4 英 領 香 港 | 570 | 401 | 169 | — | — | — | — | — | — | 6 | 1 | 270 |
| 5 荷 領 澳 門 | 14 | 5 | 9 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 6 暹 羅 國 | 522 | 351 | 171 | 1 | — | — | — | — | — | 12 | — | 184 |
| 7 佛 領 印 度 支 那 | 234 | 194 | 40 | 7 | — | — | — | — | — | 1 | — | 86 |
| 8 英 領 馬 來 亞 | 5,908 | 3,499 | 2,409 | 157 | 11 | 1,019 | — | 60 | — | 211 | 34 | 920 |
| 9 英 領 薩 拉 瓦 克 | 1,494 | 963 | 531 | 208 | 3 | 277 | — | — | — | 114 | 93 | 140 |
| 10 佛 領 北 婆 羅 洲 | 13 | 8 | 5 | — | — | — | — | — | — | — | — | 5 |
| 11 イ ラ ン 國 | 40 | 26 | 14 | — | — | — | — | — | — | — | — | 8 |
| 12 ア フ ガ ニ ス タ ン 國 | 19 | 13 | 6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 13 英 領 印 度 及 錫 蘭 | 1,400 | 812 | 588 | 12 | 1 | 15 | — | — | — | 65 | 33 | 366 |
| 14 蘭 領 東 印 度 群 島 | 6,419 | 4,212 | 2,207 | 142 | 137 | 401 | 1 | 7 | — | 200 | 10 | 2,113 |
| 15 比 律 賓 | 25,776 | 17,211 | 8,565 | 6,262 | 14 | 1,466 | — | 14 | — | 1,497 | 19 | 2,548 |
| 16 米 領 加 羅 林 群 島 | 61 | 37 | 24 | 2 | — | 1 | — | — | — | 7 | — | 7 |
| 17 太 平 洋 諸 島 | 1,896 | 1,596 | 300 | 47 | 1 | 590 | — | — | — | 206 | 8 | 221 |
| 18 北 本 布 | 264,771 | 144,107 | 120,664 | 29,220 | 2,535 | 2,585 | 10 | 239 | — | 5,755 | 1,421 | 14,654 |
| | 113,592 | 65,941 | 47,631 | 15,353 | 1,037 | 821 | 10 | 239 | — | 2,177 | 478 | 9,201 |
| | 151,199 | 78,166 | 73,033 | 13,867 | 1,498 | 1,764 | — | — | — | 3,578 | 943 | 5,453 |
| 19 英 領 加 拿 大 | 23,045 | 13,140 | 9,905 | 1,780 | 15 | 1,029 | — | 73 | — | 1,694 | 88 | 908 |
| 20 メ キ シ コ 國 | 5,025 | 3,014 | 2,011 | 450 | 1 | 274 | — | 5 | — | 136 | — | 744 |
| 21 エ ル ・ サ ル バ ド ル 國 | 9 | 5 | 4 | — | — | — | — | — | — | — | — | 3 |
| 22 キ ュ ー バ 國 | 672 | 488 | 184 | 213 | 1 | 30 | — | 1 | — | 23 | — | 92 |
| 23 パ ナ マ 國 | 351 | 247 | 104 | 2 | — | 4 | — | — | — | 25 | 3 | 164 |
| 24 コ ロ ン ビ ア 國 | 289 | 178 | 111 | 65 | — | — | — | 3 | — | — | — | 22 |
| 25 ヴ エ ネ ズ エ ラ 國 | 25 | 20 | 5 | — | — | — | — | — | — | — | — | 17 |
| 26 ベ ル ー 國 | 21,503 | 13,261 | 8,242 | 1,966 | — | 2 | — | — | — | 421 | 9 | 4,009 |
| 27 ポ リ ヴ ァ イ ア 國 | 875 | 591 | 284 | 92 | — | 3 | — | — | — | 37 | — | 226 |
| 28 チ リ 國 | 695 | 450 | 245 | 37 | — | — | — | 8 | — | 20 | — | 232 |
| 29 ブ ラ ジ ル 國 | 199,880 | 111,438 | 88,442 | 34,917 | 156 | 86 | 1 | 2 | — | 1,134 | 35 | 1,968 |
| 30 アルゼンティン 國 | 6,659 | 4,828 | 1,831 | 1,103 | 1 | — | — | — | — | 1,363 | 26 | 965 |
| 31 ウルグアイ 國 | 89 | 56 | 33 | 16 | — | — | — | — | — | 1 | — | 14 |
| 32 パラグアイ 國 | 520 | 293 | 227 | 83 | 2 | — | — | — | — | 1 | — | 22 |
| 33 歐 洲 諸 國 | 25,077 | 24,191 | 886 | 15 | 1 | — | — | — | — | 49 | — | 311 |
| 34 埃 及 國 | 72 | 36 | 36 | — | — | — | — | — | — | — | — | 25 |
| 35 エ テ イ オ ピ ア 國 | 4 | 2 | 2 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 36 南 阿 聯 邦 | 43 | 21 | 22 | — | — | — | — | — | — | 1 | — | 9 |
| 37 英 領 東 阿 弗 利 加 | 75 | 44 | 31 | 4 | — | 4 | — | — | — | 1 | — | 15 |
| 38 佛 領 アル ジ エ リ ー | 1 | 1 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 1 |
| 39 佛 領 モ ロ ッ コ | 22 | 11 | 11 | — | — | — | — | — | — | — | — | 6 |

本表ハ外務省ノ調査ニ據リ關東州及南洋群島居住者ヲ含マズ。但滿洲國ニ於ケル滿鐵附屬地居住者ハ之ヲ含ム。從屬者ハ各職業別ニ加算ス。

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

て海外在留邦人數に關しては只外務省の報告があるのみである。

外務省調査部の「海外各地在留邦人人口表」、によつて昭和十三年度在外本邦人人口の分布を六大陸在留地方別に觀察すると、亞細亞に於ける本邦人人口は六四二、三二五人で最も多く第一位を示し、次位は北亞米利加の二六七、七七一人で、第三位は中南米の二三七、〇三七人である。以下歐羅巴洲の二五、〇七七人、大洋洲の一、八九六人、亞弗利加洲の二一七人の如き分布状態を示してゐる。

又昭和十三年度の海外在留邦人（二、四九九、八一八人）の變動狀況を民籍別に觀察すると内地人は（十三年度一、四二一、一五八人）昭和十二年の調査（一、二七九、四九六人）に比し十四萬一千六百六十一人の増加を見てゐる。朝鮮人は昭和十二年度の八十萬一千二百九十九人に對して二十七萬人を増加し八〇一、二九九人になつてゐるが、これは主として滿洲及中華民國に於ける増加であり、臺灣人は昭和十二年一五、一五二人から昭和十三年の七、三五七人に約七、五六三人を減少したがこれは支那に於ける減少が主なるものである。關東州及び南洋委任統治地域を除いた海外在留邦人數は六十七萬八千四百五十三人で十二年に比し、十二萬八千六百六十三人の増加を見たが其の主なる移出國は滿洲及中華民國である。

今熱帯及亞熱帯地域への邦人進出狀況を見るにブラジルに於ては明治四十一年始めて邦人が進出して以來三十年在留本邦人數は十九萬九千八百八十人であつて前年よりも二千四百七十七人の増加を見てゐる。同國への移民は大正十四年以後特に著しい増進を示し昭和四年二萬六千人、同八年二萬四千人、同九年一萬九千人と増加してゐるが然るにブラジル政府は昭和九

年七月十六日公布の新憲法（移民制限條項を含む）によつて邦人入國許可割當數を一年二千八百四十九人と規定し昭和十一年四月更めて三千四百八十人に増加した。

北米合衆國では其の本土に約十一萬三千人、布哇に約十五萬七千餘人の在留がある。この中本土在留者は昭和十二年度に比して一千一百餘人の減少を來し、又布哇も七百三十一人の減少を來した。在米邦人は其の人口總數に於て夙に海外在留邦人の首位を占めてゐたのであるが、(1)昭和四年以後引續いた同國經濟不況特に第一世の主要職業である農業の不況がまた充分回復しないことも、(2)大正十三年の移民法成立以來移住者の皆無となつたのに反し歸國者が相踵いだこと、(3)同年本邦國籍法改正の結果出生兒の過半數を本邦人として計算しないことになつたため等の理由によつて其の増加率が漸減してゐるのである。本統計に計上されてゐない在米出生兒即ち日系米國市民に付ては即確な數字を知ることが出来ないが、昭和九年の在米各領事館の調査によると本土に約八萬人（日系第一世は約七萬一千人）、布哇に約十萬六千人（日系第一世は約四萬二千人）と推定されてゐるが、日系米市民の占むる割合は第一世の近年著しく減少してゐたのに反比例して増加してゐる。

南洋方面の在留者は昭和十三年度に於て前年に比し約一千二百餘人を増加し四萬四百六十四人になつた。地域別にその増加數を見るとフィリッピンの一七七八十五人、泰國の一人、英保護領サラワク、ボルネオの五百七十三人、グアム島の四人、リバンの八人であるが他の諸國に於てはいづれも減少した。

殊に蘭領東印度に於ける減少は近年蘭印政府の本邦に對する各種の取扱

方の非友誼的なるため一例へば昭和八年の入國令改正(本邦人の入國許可額は一ヶ年八百人に限定された)、昭和十年八月二十四日に實施された非常外國人勤勞條令等の公布——本邦人の進出が阻碍されたによるものである。

ブラジルを除く中南米諸國に於てはアルゼンチン及メキシコの三百九十九二人増を始めとして其他パラグアイの百人、ボリヴィアの百六人、サルヴァドルの二人、キューバの四十二人、チリーの九人、ウルグアイの十五人はいづれも些少の増加であるが、ペルーの六百四十七人、パナマの七人、コロンビアの五人は各、減少し、中南米全體として九千餘人の増加である。

尙ほ職業別にこれを見ると有業者は四十八萬六千二百二十六人であつて總數百十七萬一千四百二十三人に對し其の半數以上は主として家族の無業者である。有業者の内最も多數を占めてゐるものは商業であつて約十一萬九千餘人、其他の業務では農業が十萬六千餘人、次いで公務自由業(官公吏を主とした醫務、教育關係業等を含む)の約八萬一千餘人、工業の約六萬三千人等である。其の増加を昭和十二年度と比較すると各業とも増加してゐるがその最も顯著なものは公務自由業の約三萬二千餘人、次に農業及工業の約二萬餘人、其他有業者の十五萬餘人である。

今熱帯亞熱帯地在留邦人の職業分布を國別に見れば英領印度、ビルマ、セイロンの本邦人は一千四百人で内カルカツタ、孟買、カラチ方面にあるものは主として棉花の買付、又は綿糸布、雜貨等を取扱ふ邦人商會の社員であつてビルマ、セイロン地方のものは小商業、漁業、寫眞業に従事してゐる。

南洋方面ではフィリピンでは約一萬七千五百人がダヴァオ地方で麻裁

培に従事してゐる。蘭領東印度の約六千餘人、英領マレーの約五千餘人は漁業、ゴム、椰子の栽培關係者、輸出入貿易關係者、小賣業者、錫鑛業關係者であり英領北ボルネオの過半數は漁業關係者である。

北米本土在住者は約十一萬三千餘人であつて加州を中心として大部分太平洋沿岸に散在してゐる。野菜耕作、果樹、花卉の栽培等を主とする農業者が最大多數であるが、これに次ぐものは物品販賣、輸出入貿易業、飲食店經營、家庭使用人、洗濯屋、理髮業、日傭労働、工場及鐵道の職工、自動車運轉手である。

ハワイの邦人は約十五萬一千餘人であつて、朝鮮人を加へれば十五萬七千人に達する。其の職業は甘蔗耕作地の従事者、製罐業者、漁業者が多數であり其他會社員、商店員、土木建築業者、小賣業者、自動車運轉、洗濯業、日傭労働、家庭勞務に従事するもの多く、又教育關係者、醫務關係者等の自由職業者も多い。

中南米諸國では邦人數は合計二十三萬六千五百九十二人であつて其の八割四分を占めるものはブラジルで、これに次ぐものペルー、アルゼンチン、メキシコである。

ブラジルの邦人數は十九萬九千八百八十人で、その九割までがサンパウロ州に在住し、珈琲園に勞働してゐるが近來奥地に入り米、馬鈴薯、棉花の栽培に従事するものが増加した。

ペルーの邦人數は二萬一千五百三人で、其の大多數はリマ市、カリヤオ商港等に居住し、雜貨、食糧品の販賣、コーヒー店、理髮屋等の小營業に従事してゐるが海岸地方の者は米、棉、甘蔗を栽培してゐる。

アルゼンチンの邦人數は六千六百五十九人であつて其の過半數はブエノ

ス・アイレスに集中し洗濯業、運轉手、コーヒー店等の營業に従事してゐるが本邦商會の出張員として駐在してゐるものも多い。

メキシコの邦人數は約五千餘人であつてメキシコ市、ソーラ州、コアウイラ州、チウアウア州等に散在し雜貨食料品の販賣に従事するが農業者はメキシヤリーに漁業者はエンセチダ附近に居住してゐる。

濠洲地方の邦人數は一千八百九十六人であつてこれを地方別に見ると濠洲の一千七百餘人、西濠洲の五百五十人、北濠洲の約七百人、南濠洲の約三百人、ニューカレドニヤ島の百五十六人である。その職業は濠洲在住者は木曜島方面の眞珠採取業關係者が多く、クインスランド洲の漁業、製鹽業労働者、西濠洲の船舶従事者は多數であり、次に洗濯業者、會社員である。佛領ニューカレドニヤ在住者は農業關係者多く、漁業、小賣業、日傭労働者の順である。

アフリカのエヂプト、エチオピア、英領東阿、南阿聯邦、佛領アルジェリヤ、佛領モロッコを合せ邦人は漸く百九十三人を數へるに過ぎず其の大多數は商業關係者である。

尙ほ人口の動態統計に關しては殆んど資料がなく只東亞研究所の濱井氏の研究があるのみである。その據られた統計資料は届出より集計されたものであり、且つ員數も少ないので在外邦人の一般的人口現象を充分明かにすることは出来ないのであるが然しその傾向を知ることが出来るであらう。(濱井生三「東亞諸地域に在住する日本人の人口動態に關する二三の考察東亞研究所資料ノ内第八十三號C六五頁」)

「支那、比律賓、蘭領東印度、馬來の四地域を含む東亞に在住する日本人の人口現象特に動態に關して、出生、死亡等の諸届より集録した統計に

依つてその概略を一瞥すれば次の如き結果となる。

東亞諸地域に於ける日本人の在住の歴史尙淺きを以て、各地域に於ける人口の年齢構成は單一のピラミッドを成さず、少年階級の少い構成であつて、ピラミッドが再構成せられつゝある段階にある。而して女子の數は男子に比して極めて少い人口構成であつて植民地的特徴を示してゐる。

平均婚姻年齢(再婚を含む)は概して男女共日本内地よりも高く、出生率を低下せしめる一因となつてゐる。而して男女の婚姻年齢の相關は大體に於て大差ないが、支那に於ては昭和十二年は昭和十二年よりも低下し、男女の年齢の差の分布が廣くなつてゐる。

出生率は一般に外地に於て低下して居るが女子の分娩年齢は外地に於て内地より低い。但し比律賓に於ては出生率が著しく高いことは注目し値する。年齢階級別に出生率を見るときは日本内地及び支那を含む溫帶型と比律賓、蘭印、馬來を含む熱帶型の二型を區別することが出来る。溫帶型は分娩年齢のモードが熱帶型よりも若く、出生率の年齢分布は熱帶型よりも稍、平たい傾向を持つてゐる。支那の中でも南支は兩型の移行型と見ることが出来る、明かに自然環境の影響を認めることが出来る。

死亡率は衛生状態の悪い外地にありて却つて日本内地よりも低くなつてゐる。併し之は人口構成の相違即ち壯年層が多くて老年層の少いことから來る誤差を含むものと考へられる。死因は内地と外地では多少の相違がある。外地に於て注意すべき死因は傳染病及び寄生蟲病である。殊に呼吸器の結核は最も多く、内地と同様に問題とさる可き性質のものである。其の他外死因も注目される可きものであり、衛生機關の不備の爲に起る不詳の原因も注意すべきである。自然増加率は出生率と平行して比律賓に於て著し

く高い。他の地域では種々高低があり特に年によつて違ふことは不健全な自然増加を示すものである。Vital Indexの観点より人口生産に就いて考へれば、支那に於ける日本人の人口生産の能率は一般に低く、南方諸地域では非常に高い。在支日本人は出生率も死亡率も生物學的能率も共に低く頗る不健康と言ふ可く、南方諸地域は出生率、死亡率共に低いが生物學的能率は高く、比較的健康と言へる。但し比律賓は出生率高く死亡率低く、従つて生物學的能率もよく、日本内地に於ける日本人よりも健康状態にあると考へられる。」

第四表 出生數及粗大出生率

| 地域 | 一九三六 | | 一九三七 | |
|------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| | 出生數 | 人口 (人口一〇〇ニツキ) | 出生數 | 人口 (人口一〇〇ニツキ) |
| 日本内地 | 男 一,〇七六,一九七 女 一,〇三三,七七一 | 男 三,四〇〇,〇〇〇 女 三,四〇〇,〇〇〇 | 男 一,一六一,四五四 女 一,〇六四,五八〇 | 男 三,七九七,〇〇〇 女 三,五五五,一〇〇 |
| 東亞 | 男 一,三三〇 女 一,三三三 | 男 五五,二二七 女 四〇,三三〇 | 男 一,四一〇 女 一,三七一 | 男 六六,七四〇 女 四〇,八二二 |
| 支那 | 男 二,六九三 女 七,七五四 | 男 九五,五五七 女 三三,三三一 | 男 二,六七一 女 六,四四一 | 男 九七,五九五 女 三三,九一九 |
| 關印 | 男 一,四九八 女 八九 | 男 六〇,七六八 女 二〇,八四三 | 男 一,四六一 女 九 | 男 五九,八八九 女 二〇,八 |
| 比律賓 | 男 一六六 女 四七四 | 男 六四,九七七 女 一四,三三九 | 男 一六六 女 四七四 | 男 六四,九七七 女 一四,三三九 |
| 計 | 男 九三 女 四三 | 男 二二,〇八七 女 四,三六 | 男 一〇,四 女 三,九九二 | 男 四,七 女 三,九二七 |

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

※ 大日本帝國統計年鑑第五六、五七回ニヨル。

| 地域 | 一九三六 | | 一九三七 | |
|------|--------------------|----------------------------|------------------|----------------------------|
| | 死亡數 | 人口 (人口一〇〇ニツキ) | 死亡數 | 人口 (人口一〇〇ニツキ) |
| 馬來 | 男 三 女 三 | 男 四,三三四 女 三,九五一 | 男 一〇 女 七 | 男 四,一四五 女 三,八五五 |
| 日本内地 | 男 六,七〇八 女 五,九二二 | 男 三,四〇〇,〇〇〇 女 三,四〇〇,〇〇〇 | 男 一,八一 女 一,六一 | 男 三,五五五,一〇〇 女 三,五五五,一〇〇 |
| 東亞 | 男 六〇六 女 五九九 | 男 五五,二二七 女 四〇,三三〇 | 男 一〇 女 〇九 | 男 六五 女 五八 |
| 支那 | 男 一,〇〇五 女 七五七 | 男 九五,五五七 女 三三,三三一 | 男 一〇五 女 一〇一 | 男 九七,五九五 女 三三,九一九 |
| 關印 | 男 四 女 三 | 男 四四,二二 女 二〇,八四 | 男 〇九五 女 〇八 | 男 四〇 女 一九 |
| 比律賓 | 男 一四 女 一六 | 男 一四,三三九 女 六,七四八 | 男 〇八三 女 〇七 | 男 一三 女 一六 |
| 馬來 | 男 三 女 三 | 男 四,三三四 女 三,九五一 | 男 〇七五 女 〇六四 | 男 三 女 二 |
| 計 | 男 五〇 女 一 | 男 七,一八五 女 〇七〇 | 男 五九 女 七 | 男 七〇,三〇〇 女 〇八四 |

尙ほ十二年度の外務省に届出された出生、死亡數は次の如くである。

(戶籍法第六十條及第六十一條に依り在外邦人よりの届出に依る身分届又は届出事件に關する證書の謄本を所轄大、公使、領事に於て受理したるときは同法第六十二條に據り處理し居れる處昭和十三年十二月一日より

昭和十四年十一月三十日迄の間に於て出生届、死亡届、国籍喪失届及婚姻届を外務大臣より市、區、町、村長へ送附したる數は出生届二八、五九四件、死亡届二二、四二五件、国籍喪失届一、三一九件、婚姻届二、八七四件、總計四五、二二二件にして其の内譯左の如し。

在外邦人の出生、死亡、国籍喪失、婚姻届表

(本省處理分 自昭和十三年十二月一日 至昭和十四年十一月卅日)

| 地方別及種別 | 出生 | | 死亡 | | 国籍喪失 | | 婚姻 |
|--------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 亞細亞及南洋 (滿華を含まず) | 二、四一三 | 二、三六六 | 三、〇〇〇 | 二、三三三 | — | — | — |
| 中華民國 | 二、〇〇〇 | 一、八〇五 | 三、八〇五 | 一、三九一 | — | — | — |
| 滿洲國 | 七、〇七〇 | 七、二九七 | 一、四八五 | 三、五七二 | — | — | — |
| 北米合衆國 | 五、五二二 | 一、二四四 | 八、三三三 | 三、〇五五 | 一、二八〇 | 二、四二五 | 四、〇〇〇 |
| 加奈陀 | 二、二八二 | 一、七〇七 | 一、六五五 | 一、四七二 | — | — | — |
| 中南米諸國 (伯國を含まず) | 五、四三三 | 一、〇七七 | 三、〇七二 | 九、三〇五 | — | — | — |
| 伯刺西爾國 | 二、六九〇 | 二、三九五 | 五、〇六六 | 四、九一一 | — | — | — |
| 其他 | 二、二七二 | — | — | — | — | — | — |
| 合計 | 二、四七五 | 二、三六四 | 二、八五四 | 七、七七七 | — | — | — |

(又国籍法第二十條の二第二項の規定により指定せられたる外國即ち亞米利加合衆國、亞爾然丁國、伯刺西爾國、加奈陀、智利國、祕露國、墨西哥國の七箇國に於て出生したる者の内日本国籍を留保せる者及右指定國に於て大正十三年十一月三十日までに出生したる者の届書を外務省に於て處理したる數は昭和十三年十二月一日より昭和十四年十一月三十日に至る分七、八一三件にして其の内譯左の如し。)

国籍留保者の各國別及男女別表

(大正十三年十一月三十日までに出生したる者の届書を外務省に於て處理したる數をも含む)

(自昭和十三年十二月一日 至昭和十四年十一月三十日)

| 國別 | 男 | 女 | 計 |
|-------|-------|-------|-------|
| 北米合衆國 | 五九二 | 五五二 | 一、一四四 |
| 亞爾然丁國 | 一四二 | 一一二 | 二五四 |
| 伯刺西爾國 | 二、六九〇 | 二、三九六 | 五、〇八六 |
| 加奈陀 | 一一八 | 一三七 | 二六五 |
| 智利國 | — | 八 | — |
| 祕露國 | 四七〇 | 四五一 | 九二一 |
| 墨西哥 | 六二二 | 六九 | 一、三三一 |
| 計 | 四、〇八八 | 三、七二五 | 七、八一三 |

第四章 アジア民族の熱帯移民

東、南アジアには世界總人口の半分が地球表面の四%にしかならない地域にとちこめられてゐる。然るに太平洋印度洋の對岸には東部より幾百萬の人口の流がはけ口の許可を求めてゐる廣大な無人の地域が存してゐる。アジアの内部にある未開拓のモンスーン、赤道、寒冷地帯への支那人、日本人、印度人移民の溢れ出る激流は近世に於けるアジア大陸の最も重要な而も看過されてゐる世界史的事實——民族的、政治的、經濟的問題なのであつて現在印度、太平洋地域には人口稠密な土地から稀薄な土地へと常に移民の流れを誘つてゐる人口壓力、生活標準の甚だしき不均衡があるのである。

この地方竝に東洋人締出しの排他的國家又は地方的政策に於て我々は文明人種を世界鬭争に捲き込むところの重大なる結果の萌芽を見出すのであ

る。

東印度諸島一帯への移住は第一世紀からの印度のものであつて七八年頃印度の王がババドに來り遊牧民を發見したことが傳へられてゐる。

又アラビヤの商人が東印度諸島に航海してきたのはモハメット時代よりづつと以前であつたが後回教はアラビヤ商人をしてその新教理の宣傳者と化しめたのである。然しこの改宗勧誘の効果は十三、四世紀の頃までは現はれなかつた。それでこのアラビヤ人の影響は人種的であるよりもむしろ文化的であつた。ポルトガル人が居留地を設けたのは十六世紀初頭であつた。(Alfred Cort Haddon: The wanderings of Peoples. 小山榮三譯「民族移動史」四七頁)

支那人が南洋へ移殖したのは甚だ古く唐代であつて九四三年に印度、セイロン、南洋群島の各地を會遊したアラビヤ人アブル・ハツサン・アリ・エレマスデ Abu-I-Hasan al-Elmasudi はスマトラに黄巢の亂を避けた支那人が多數耕植してゐたことを記してゐる。是以唐代當島中國海外正式開幕之始。此即華僑所以呼唐人之由來也。(李長傳著「中國殖民史」六一頁)

然し華僑が現在の如き世界に分布をなしたのは彼等が自ら進んで移民したのではなくして天地會等の祕密結社が殖民事業を經營し一方苦力として歐米人の手によつて世界各地に送られたものである。そのうちでも英領マレー半島は支那人の南洋移民の中心であつて一九〇四年から一九一三年の十年間の渡來者の數を見ても其の勢の一斑を知ることが出来る。

| | | |
|-------|---------|--------|
| 年次 | 移民數 | 契約移民 |
| 一九〇四年 | 二〇四、七九六 | 一六、九三〇 |
| 一九〇五年 | 一七三、一三一 | 一四、八六四 |

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

| | | |
|-------|---------|--------|
| 一九〇六年 | 一七六、五八七 | 一八、六七五 |
| 一九〇七年 | 二二七、三四二 | 二四、〇八九 |
| 一九〇八年 | 一五三、四五二 | 一三、六〇四 |
| 一九〇九年 | 一五一、七五二 | 一六、〇七一 |
| 一九一〇年 | 二一六、三二一 | 二六、三一五 |
| 一九一一年 | 二九六、八五四 | 二四、三四五 |
| 一九一二年 | 二五八、六四四 | 一三、七〇〇 |
| 一九一三年 | 二四〇、九七九 | 一四、一九八 |

全世界の華僑人口の正確な數字は不明であるが其の數は近來特に増加したものであつて一八九九年頃は四百萬人、一九〇三年頃は七百三十萬人、一九〇六年頃は七百七十萬人、一九〇八年には八百六十萬、一九二五年には九百九十萬となつてゐる。一九三三年の僑務委員會の報告では七百八十萬となつてゐるがこれは臺灣本島人(日本籍)を華僑から省いてゐるからであらう。

各大陸別にするると

| | |
|-------------|------------|
| アジア | 一一、一三六、五六八 |
| オーストラリア | 五〇、五三三 |
| 北米 | 一八六、四五四 |
| 南米 | 一七四、八九七 |
| アフリカ | 九、五〇〇 |
| ヨーロッパ(露を含む) | 二八、三〇〇 |

であつてアジア洲が最も多くその中南洋に住むものは實に五百九十七萬人を數へるのである。

三つの東洋の國のうちで人口壓力は印度、支那に於けるよりも日本に於て最も高い。

印度の工業資源は西部歐洲や合衆國に比べると限定されてゐるがそれでも日本に於けるよりも遙かに大であり多種であるに考へられなければならない。かくして急速な工業化はその數百萬の飼養を可能とするであらう。然しより高い生活標準の欲求と人口過剰は印度海岸より毎年約二〇〇、〇〇〇人の移民を餘儀なくしてゐる。

海外に居住してゐる印度人の總人口四、一二五、〇〇〇のうち一八六、〇〇〇が英帝國以外の地に住んでゐるのである。約一、九一〇、〇〇〇人の日本人は内地以外に住んでをり、只その七六二、五〇〇の日本人がその帝國外に住んでゐるのである。然し支那人は印度移民や日本移民よりも數に於て勝つてゐる。

陳達氏に従へば現在海外に住んでゐる支那人數は八、八一八、〇〇〇である。東洋人の排斥があるにも拘らず現在海外に居住してゐる東洋人の總數は約千六百萬である。主に經濟的恐慌と或程度古い移民國によつて採用された制限手段によつてアジアに於ける大陸移出は數年來挫折してゐる。

東洋から南阿への三つの移動——印度人、支那人、マレー人——は百五十年間に行はれたものである。

南阿への印度移民は支那人やマレー人の移民よりも遙かに成功してゐることは注意に價する。ナタールに於ても、英領ギアナ、ジャマイカ、トリニダットに於ても印度人の契約労働者は後に自由人となつた。その數は農園や鑛山に働いてゐる契約労働者の數を遙かに越えてゐる。苦力は農民、果樹栽培者、職人、商人、貿易商と大部分置き代へられ、小數の自由職業階級も見出される。今や約三二〇、〇〇〇の印度人がギアナ、西印度に居る。印度人口は今や英領西印度の數部の性質を變へつゝある。既にトリ

ニダットの人口の三分の一、英領ギアナの人口の三分の一は印度人である。彼等はそこに米作の知識と技術とを齎し、英領ギアナの耕作地の三〇パーセントは田である。一般に印度人は英國旗の下に諸國に移民した。極少の印度支那を除いて蘭領印度、ニューカレドニア、レユニオン、モザンビックの如き太平洋諸島に移民してゐるが特に蘭領ギアナには略五、〇〇〇人の印度移民を持ち、合衆國、英領ギアナの近接地域からの過剰人口を吸収して印度からの五七、〇〇〇人の移民を持つてゐる。

太平洋に於ては印度人はフィジに支那人はサモア、ツサイテイ、マルケサスに、日本人はハワイにその前哨地を持つてゐる。マレーでは印度人は十世紀も支那人に先んじたのであるが今日では支那人は四對一の割合で印度人より數が多く而も強固な地位を築上げてゐる。蘭領東印度では過去數世紀にジャヴァ、スマトラ、バリに印度人の植民地があり、その文化的影響は大であつたにも拘らず印度移民は遙かに其の數支那人移民に劣り、支那人の數は約一、二三四、〇〇〇人と計算されてゐる。

一般に東洋人の移民は總ての集團移動の如く地理學的に緯度、等溫線によつて限定されてゐる。然し支那人と日本人は印度人よりも廣い範圍の移民を示してゐる。これは恐らく黄色人種が氣候的變化により多き適應性を持つためであらう。印度の平均緯度と同じ北緯二十度と南緯二十度の地帯に嚴密に局限されてゐることは印度人にとつて不利に違ひない。これは印度人の移民は主に熱帯に限られることを意味するものである。

熱帯ブラジルは一九二四年以來日本海外移民の主な目的地であつた。又印度の移民も廣大な農業、工業資源の開發のために勧誘された。

然し不景氣と失業の結果として一九三二年に制限令が通過した。最も印

度人にとつて適應してゐるのは西印度の熱いモンスーン地方であつてこゝではその人口増加、農業的繁榮に寄與してゐる。

將來印度人移民に最も適した且つ重要な土地は東アフリカ、北西オーストラリヤ沿岸平野の如き未開拓モンスーン地方であつてかゝる所では印度人の農業經驗が非常な價値を發揮するであらう。然るに今や英、佛を始め白人の支配してゐる植民地に於ては東洋人移民の排斥又は制限が行はれてゐる。

| 未開拓赤道地方 | 總人口 | 平方哩人口 | 移住支那人數 | 移住印度人數 |
|------------|-----------|-------|-----------|-----------|
| セイロン | 五,三三〇,〇〇〇 | 二〇一 | — | 一,三三〇,〇〇〇 |
| 蘭領東印度 | 六,〇七〇,〇〇〇 | 二 | 一,四〇〇,〇〇〇 | 二七〇,〇〇〇 |
| 英領ボルネオ | 六,〇〇〇,〇〇〇 | 二 | 五〇〇,〇〇〇 | 一三〇,〇〇〇 |
| 未開拓モンスーン地域 | 總人口 | 平方哩人口 | 移住支那人數 | 移住印度人數 |
| ブルマ | 三,三三〇,〇〇〇 | 五七〇 | 一五〇,〇〇〇 | 一,四〇〇,〇〇〇 |
| マレー半島 | 三,五〇〇,〇〇〇 | 六〇 | 一,八〇〇,〇〇〇 | 六四〇,〇〇〇 |
| 泰 | 一,六〇〇,〇〇〇 | 五八四 | 一,六〇〇,〇〇〇 | 一〇〇,〇〇〇 |
| 印度支那 | 二,五〇〇,〇〇〇 | 七九 | 七〇〇,〇〇〇 | 六〇〇 |
| フィリッピン諸島 | 三,三三〇,〇〇〇 | 一〇四〇 | 八七〇,〇〇〇 | 不明 |
| 臺灣 | 四,〇〇〇,〇〇〇 | 三三〇 | 四三二,〇〇〇 | ナシ |

東部アジアのモンスーン地帯のうちブルマ、マレー半島は今尙比較的人口稀薄である。印度支那も殆んど一ぱいであり、アンナン、トンキンも既に大部分開拓され人口も稠密である。

これはガンジス平野、揚子江、球江の過剩人口たる印度人、支那人が比較的人口稀薄なモンスーン地帯附近へ集團的に移民したことを示してゐる。

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

こゝには支那人、印度人の斷へざる侵入が比較的未開拓の土地に行はれてゐる。土人は主に山嶽森林地帯に住んでゐるので移民が樹を倒し、開墾し、町を作つたのである。一九二七年の一年間に四二八、三四三人の移民がビルマに、五一五、三九四人の移民がマレー半島に、一四二、五二二人の移民が泰に、六三、八八八人の移民が印度支那に入つた。同年に三〇三、一六七人がセイロンへ、四五、五六六人が蘭領東印度へ移民したのである。

次の表は一九三七年の調査に係はる人口稀薄な赤道ジャングル地域へ流れ入んだ移民の數を示してゐる。

| 支那人 | 數 | 總數に對する百分率 |
|---------|------------|-----------|
| 泰 | 一,九〇〇,〇〇〇 | 一九・〇 |
| 印度支那 | 七〇〇,〇〇〇 | 七・〇 |
| マレー | 一,八〇〇,〇〇〇 | 一八・〇 |
| ボルネオ | 一五〇,〇〇〇 | 一・五 |
| フィリッピン | 七〇,〇〇〇 | 〇・七 |
| 英領北ボルネオ | 五〇,〇〇〇 | 〇・五 |
| ハワ | 二五,三一〇 | 〇・二 |
| 蘭領東印度 | 一,二四〇,〇〇〇 | 一二・四 |
| 太平洋諸島 | 五〇,〇〇〇 | 〇・五 |
| オーストラリヤ | 二〇,〇〇〇 | 〇・二 |
| 合衆國 | 七四,九五四 | 〇・七 |
| カナダ | 四五,〇〇〇 | 〇・四 |
| 其他 | 三,八七四,七三六 | 二八・九 |
| 計 | 一〇,〇〇〇,〇〇〇 | 一〇〇・〇 |
| 印度人 | | |
| 國名 | 數 | 總數に對する百分率 |
| ブルマ | 一,三〇〇,〇〇〇 | 三二・六 |

| 國名 | 數 | 總計に對する百分率 |
|-----------------|-----------|-----------|
| セイロン | 一、一三三、〇〇〇 | 二七・五 |
| マレー | 六二八、〇〇〇 | 一五・二 |
| 蘭領東印度 | 二七、六三八 | 〇・六七 |
| 英領ギアナ | 一三〇、〇七五 | 三・二 |
| トリニダット | 一三三、二七七 | 三・二 |
| 蘭領ギアナ | 五七、六〇六 | 一・四 |
| フイジー | 七六、七二二 | 一・九 |
| モーリチウス | 二八一、〇〇〇 | 六・八 |
| ケンヤ、タンカニカ、東アフリカ | 八六、二二〇 | 二・〇九 |
| 南アフリカ | 一八六、〇〇〇 | 四・五 |
| 合衆國 | 四、九〇一 | 〇・一 |
| オーストラリア | 二、〇〇〇 | 〇・〇五 |
| カナダ | 一、二〇〇 | 〇・〇三 |
| 其他 | 七七、三六七 | 一・八 |
| 計 | 四、一二五、〇〇〇 | 一〇〇・〇 |
| 日本人 | | |
| 滿洲 | 二四三、二六〇 | 一・二八 |
| 支那 | 五五、七〇八 | 二・九 |
| ハワイ | 一三四、〇四二 | 七・〇 |
| フィリッピン諸島 | 一六、六六七 | 〇・八 |
| 南洋委任統治領 | 一七、八〇〇 | 〇・九 |
| 合衆國本土 | 一四〇、九四五 | 七・四 |
| カナダ | 二二、六六四 | 一・二 |
| ブラジル | 一〇三、一六六 | 五・四 |
| 臺灣 | 二二〇、二七〇 | 一・五 |
| マレーとボルネオ | 一九、六五二 | 一・〇 |
| 蘭領東印度 | 五、〇〇〇 | 〇・二 |

| 朝鮮 | 太 | 其他 | 計 |
|---------|---------|---------|-----------|
| 五三〇、〇〇〇 | 二八四、三四五 | 一一六、四八一 | 一、九一〇、〇〇〇 |
| 二七・八 | 一四・九 | 六・一 | 一〇〇・〇 |

太平洋洲に於ける白人、アジア人種の發展は其の經濟的壓力、新しい病氣の輸入、調節の危機を含んだ文化接觸に基き原住人種の人口數の甚しき減退を伴つた。然しインドネシヤでは土着人種の衰退の代りにアジア移民の發展と土着人口の發展の兩者が起つた。ジャングルが鑛山や農場よりも今尙ほ重要であるマレー半島、泰、スマトラ、ボルネオでは人種接觸は今尙ほ人種敵對を伴つてゐない。

他方フィリッピン、ブルマ、ジャバ、セイロン、印度支那に於ては移民の優勢は社會的危機を含んだ人種情勢を醸してゐる。移民が農業労働よりも貿易、金貸し又は事務的仕事に轉ずるやうなところ、又は下賤な使役をする苦力として土民と競争するところではどこでも社會的暴動の機會が大である。

南東アジアに於けるこれらの總ての移民輸入國では外來アジア人の生活機能は西洋的事業——これは或る場合銀行、保險、貿易に互つてゐる——を競争すると云ふ理由からでなく土着中産階級の發展を防げると云ふ理由で一般の憤怒を買つてゐる。これがフィリッピン、印度支那、蘭領東印度に於て何らかの形に於ける制限令施行へ導くことにしたものである。印度に接近してゐると云ふ理由で人口壓力の最良の安全弁であるブルマに於てさへ最近港や田舎の兩者に於て排印感情が露呈し、移民制限法が印度・ブルマ分離と同時に通過した。

同様マレーに於ても——法制的移民制限はないが——求職のために土民と競争が行はれてゐる。支那人や印度人がこれらの地域へ發展するとブルマ人、マレー人、アンナム人、ジャヴァ人、シンガリーズ人、太平洋島民の如き土民は經濟的搾取の必然的な過程に服従しなければならぬ。

人口壓力に餘儀なくされ、日本人も亦滿洲に其の影響力を強化し今や亞熱帯に向つて進んでゐる。同様にコーチン・チャイナ、カンボジャ、ジャヴァへの支那人の平和的侵入、ブルマへの印度人の平和的侵入は人種摩擦を齎してゐるのであつた。これは早晚東洋人自身の中に將來の鬭争の種を播いてゐるのである。

然し人種差別に關し歐米人からの侮辱とそれに對する憤懣の共同なアジア人の感情の出現とともに今狭いアジアの枠内に閉込められてゐるこの力は爆發しそして鬭争場はオーストラリア、ニージーランド、太平洋印度洋の對岸へと變ずるであらう。(V. R. Mukerjee: *The economic aspects of Asiatic emigration. Congrès international de la population, Paris 1937, IV. Démographie statistique, P. 53*)

一九一六年パトリッシ Parrish は合衆國議會に於て「熱帯は漸次温帶國に對する經濟的重要性を持つやうになつて來た、そして白人は決して熱帯植民を企圖しなかつた。又熱帯の土着民は白人支配以榮に自己を統治することは出来なかつた」と云ふ綱領を提出したのである。それにも拘らず有色人種の政治的願望と能力は増加し、民族自決、その自覺は白人の植民地又は半植民地的頤頤に反抗を昂めてゐる。フリッツピンの代表者はアメリカ人に支配されて天國へ行くより自己の政府を持つて地獄へ行く方を選ぶと云つてゐる。

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

然し多くの熱帯に於ては白人が退却する時期に未だ到達してゐない。無智な、觀念論的人道主義者及びアジアの自決主義者は熱帯に於ける白人の行政に反對する多くの批難を向けるが、然し我々は白人の功罪を共に明確に認識しなくてはならない。「この地方へ多く旅行するものは白人が土人を支配する時が永ければ永い程土人の生活は旺盛になる。アメリカ人、和蘭人、英人の如き民族の政治的、社會的、科學的勞働管理によつて生活力が如何に高められてゐるかを實感するであらう」とプライスは述べてゐる。

經濟的分野を省みると我々は熱帯に多くの豊穰な土地を見出す。資源と軍事基地としての熱帯とが現在列國の熱帯に對する價值認識である。

多くの熱帯民族の歴史に於ける主なる特徴は温帶地方の強力な白人國家による搾取の形態である。そこには實質的な奴隸制が今尚ほ行はれてゐるのであるが、熱帯の民族はそれを自覺してゐないのである。熱帯民族の無氣力性は熱帯自體の風土的產物であるか、或は白人の去勢政策の結果であるかは一つの問題であらう。

第五章 白色人種の熱帯移民

一四九七年のクリスマスの夜ポルトガル國旗を掲揚した三艘の小船を伴つてヴァスコダガマ Vasco da Gama が印度に達する爲にモーゼル灣を出發して以來熱帯南洋の支配者はポルトガル・スペイン時代(一四九七—一六〇六年)、オランダ時代(一五八〇—一六五〇年)、英國・フランス時代(一七六〇—一八〇〇年)を経由したが總て白人であつた。(Gerhard Schott: *Geogra. Phie des indischen und stillen Ozeans, S.*)

世界の植民歴史家は白人が一五〇〇年以來二十世紀の初頭までに熱帯に侵入して行つた原因と經過とを詳細に記述してゐる。

| 大 陸 | 獨立國人口 | 非獨立國人口 | 總 計 | 總計に對する非獨立國百分率 |
|-------|--------------|------------|--------------|---------------|
| アフリカ | 三、一四〇、〇〇〇 | 一一、九四〇、〇〇〇 | 一五、〇八〇、〇〇〇 | 七七・二 |
| アメリカ | 二五、二九五、〇〇〇 | 五、一四〇、〇〇〇 | 三〇、三九五、〇〇〇 | 二・〇 |
| アジア | 九七、三三五、〇〇〇 | 一八、五五六、〇〇〇 | 一一五、九七一、〇〇〇 | 一三・一 |
| ヨーロッパ | 五四、一四〇、〇〇〇 | 二七、一〇〇、〇〇〇 | 八一二、二四〇、〇〇〇 | 〇・一 |
| オセアニア | 八、三〇〇、〇〇〇 | 二、〇〇〇、〇〇〇 | 一〇、三〇〇、〇〇〇 | 一・六 |
| 總 計 | 一、八〇、〇三六、〇〇〇 | 二七、八六六、〇〇〇 | 二、〇七、九〇二、〇〇〇 | 一三・九 |

嘗て歐洲の諸國は永い間東部、南部國境に於てアジア人及びアフリカ人の壓迫を受け、血液的にも文化的にも其の影響を被つてゐた。

十五世紀からポルトガルとスペインに導かれた歐洲人の冒險心に富んだ水夫達が印度及び東印度を征服するために不毛なる西アフリカの熱帯沿岸の地理學的障壁を乗り越えた。そして大西洋を横切つてアメリカ・アジア・南洋の熱帯を迅速に支配しようとした。

當時熱帯がスペイン、ポルトガルの植民地となり得たのは二つの理由に基く。第一は早期の成功は便利な地理的位置を占めた民族が克ち得た。

南東歐洲人は既に進歩した文明の段階にあつた。そして溫暖な氣候に慣れ、北部アメリカの民族と密接に接觸してゐた。第二はこれらの所謂機械時代侵入の成功の少なからざるものは科學の基礎的知識に基づいてゐると云ふことである。航海術、地圖作成、造船、火藥の使用等南西歐洲の民族は熱帯地方を征服のために科學を利用し始めた。

ヴァスコダガマにとつての探檢の目標は「クリスタチンと香料」とを獲得することであつた。然しポルトガル、其他の歐洲の競争者にとつては新世界の發見は當時の資本主義の發展に伴つて原料市場、商品市場としての意義を持つこととなつた。そしてポルトガル人はアフリカ、印度、東印度、ブラジルの沿岸を領有した。

スペインの征服者は東印度を確保し。更に世界征覇の大目的をもつてアメリカ熱帯の高地、新世界沿岸に戰略的基地を建設し適温な島嶼にその居留地を建設した。東部、西部の兩熱帯に官吏、軍人等の滞在者と移民の二つの流が相ついで起り、後れて和蘭、英國、佛蘭西、其他も貿易の目的で居留地、定住地を獲得しようとして努力した。

最初から東流した潮流と西へ流れた潮流とはその性質と効果が全く違つて表はれた。同じ熱帯と云つても其の氣候、風土、土着人口の稠密度、その文化的段階、其の資源的價値は決して同一ではなかつた。

一般的に云へば新來者はアメリカ熱帯の數部に於て白人の移民社會を建設することが出來たが、熱帯アジア、アフリカに於ては數代に亙つても尙ほ定着出來ず彼等は常に「よそ者」としての滯在的の位置に留つてゐた。

メリデス・タウンゼンドは印度に關し次の如く書してゐる。(Meredith Townsend: Asia and Europe. P. 85)

「印度には白色人種が住まず、白人の移民地がないばかりではなく永住する目的を持つた一人の白人も居ない。その後嗣者を援助し、勵まし、調停する支配者も居ない。成功した軍人も家庭を建設しない。財産を作つた白人も邸宅を作らず其の子孫のために不動産を買ふことはしない。開拓者、運轉手、人夫頭でさへ六十歳にならない中にその土地と別れを告げ、子供も、家も、自分の跟跡も後に残さない。白人は印度に根を下してゐないのである。」

トインビーは歐洲人は印度の氣候に適合することが出來ず、そしてカナーンに侵入したイスラエル人がカナーン人を絶滅したやうに——アメリカでなした如く——印度で英國人が原住民殺戮政策をとつたとしても現存

の土着人口は殲滅するべく餘りに數多く、且つ文明に於て進歩してゐるのである。斯くして東半球に於ては印度は一九二一年に三一九、〇〇〇、〇〇〇の人口に對しわづか一五六、六三七の白人を有するのみであり、これらの白人のうち四五、〇〇〇は婦人であつた。ユーラジヤ人も一一三、〇〇〇人の少數を數へるのみである。(A. J. Toynbee: A study of history, Vol. I, P. 212)

現在世界の植民地、委任統治領となつてゐるものの大部分は熱帯又は熱帯に屬してゐる。クチンスキーの記述に従つて其の人口關係を分析してみよう。(Robert R. Kuczynski: Colonial population, P. 17)

二〇億八千萬の世界總人口のうち二億七千萬即ち一三パーセントが植民地又は委任統治領に住み、この二億七千萬のうちアジアに住むものが五五パーセント、アフリカに住むものが四二パーセント、其他が三パー

セントである。而して二億七千萬の總數のうち四分の一は英國、四分の一は和蘭、四分の一は佛蘭西、他の四分の一が他の國家の統治下にある。

第五表は植民地及委任統治領の人口の人種的構成を示したものであつてアフリカ、アメリカ、アジア、ヨーロッパに於ては白人(純歐洲人系統)、アジア人(雜種を含むアジア系統)、アフリカ人(諸雜を含むアフリカ系統)を區別しオセアニアに於ては白人、アジア人、雜種、土民に區別した。大陸別、統治國別の白人數を見れば約四、五〇〇、〇〇〇を數へる白人數は植民地、委任統治領の總人口の一個三分の二、パーセントを占めてゐるに過ぎない。

第五表 植民地及委任統治地の人種別人口

| 地域 | 年 | 月 | 日 | 白人 | アジア人 | アフリカ人 | 其他不明 | 總計 |
|---------|-------|------|---|---------|-----------|-----------|------|-----------|
| A アフリカ | アルゼリア | 一九三一 | 三 | 八 | 五、七五二、三六五 | — | — | 六、五五三、四五一 |
| | | 一九三六 | 六 | 八 | 八二九、四八九 | 六、〇八一、〇五五 | — | 六、九一〇、五四四 |
| バストラランド | 一九二一 | 五 | 三 | 八五八、九〇九 | 六、三七五、七七五 | — | — | 七、二三四、六八四 |
| | | 五 | 三 | 一、六〇三 | 一七二 | 四九七、〇〇六 | — | 四九八、七八一 |
| ベチヤナランド | 一九二一 | 五 | 三 | 一、四三四 | 三四一 | 五六〇、六三六 | — | 五六二、四一一 |
| | | 五 | 三 | 一、七四三 | 五二 | 一五一、一八八 | — | 一五二、九八三 |
| 白領ユンゴ | 一九三三 | 一 | 一 | 一、八九九 | 六六 | 二六三、七九一 | — | 二六五、七五六 |
| | | 一 | 一 | 二二、二九〇 | 一三九 | 九、四一八、七五〇 | — | 九、四四一、二一一 |
| | | | | 一八、五三九 | 一二七 | 九、三八三、一四六 | — | 九、四〇一、八四四 |

| | | | | | | | |
|---|------|---|--------|--------|-------|------------|------------|
| ニ ジ エ リ ア | 一九三一 | 四 | 二 三 | 四、六七二 | 四九〇 | 一九、一二五、六九七 | 一九、一三〇、八五九 |
| 北 ロ デ シ ア | 一九三一 | 五 | 五 | 一三、八四六 | 一七六 | 一、二九五、五〇六 | 一、三〇九、五二八 |
| | 一九三一 | 五 | 二 六 | 一、九七五 | 一、五九一 | 一、五九九、八八八 | 一、六〇三、四五四 |
| | 一九三二 | 二 | 三 | 一、九〇一 | 一、五八三 | 一、六〇六、四三一 | 一、六〇九、九一五 |
| ニ ヤ サ ラ ン ド | 一九三三 | 二 | 三 | 一、八一七 | 一、四七四 | 一、六〇八、〇二三 | 一、六一一、三一四 |
| | 一九三三 | 二 | 三 | 一、八〇〇 | 一、四〇一 | 一、六〇〇、七二三 | 一、六〇三、九一四 |
| | 一九三五 | 二 | 三 | 一、七八一 | 一、四〇〇 | 一、六〇〇、〇七六 | 一、六〇三、二五七 |
| 葡 領 ギ ネ ア | 一九三一 | 二 | 三 | 九八三 | 二六 | 三六三、九二〇 | 三六四、九二九 |
| | 一九三一 | 二 | 三 | 九〇四 | 五五〇 | 三、四五〇、〇四七 | 三、四五一、五〇一 |
| ル ア ン ダ ・ ウ ル ン ヂ | 一九三二 | 二 | 三 | 八一 | 五二三 | 三、四五〇、一二六 | 三、四五一、四五〇 |
| | 一九三三 | 二 | 三 | 八〇三 | 五五九 | 三、〇三五、二三五 | 三、〇三六、五九七 |
| | 一九三四 | 二 | 三 | 八六八 | 五三四 | 三、二九一、七六八 | 三、二九三、一七〇 |
| | 一九三五 | 二 | 三 | 八九三 | 五八〇 | 三、三八五、七〇七 | 三、三八七、一八〇 |
| シ エ ラ レ オ ン | 一九三一 | 四 | 二 六 | 七一八 | 一、二一六 | 一、七六六、六九七 | 一、七六八、六三一 |
| ソ マ リ ー コ ー ス ト | 一九三一 | 一 | 一 | 六二八 | 四九九 | 六八、六五五 | 六九、七八二 |
| ソ マ リ ー ラ ン ド (英) | 一九三一 | 四 | 二 六 | 六八 | 二、一五七 | 三四五、一五八 | 三四七、三八三 |
| | 一九三一 | 五 | 三 | 一九、四三二 | 一一 | 二〇八、二九六 | 二二七、七三九 |
| | 一九三二 | 三 | 三 | 三三、八四〇 | 一 | 一三七、六四七 | 二七〇、四八七 |
| | 一九三二 | 三 | 三 | 三三、〇〇〇 | 一 | 一四二、二九〇 | 二七四、二九〇 |
| | 一九三三 | 三 | 三 | 三一、六〇〇 | 一 | 二四一、七三三 | 二七三、三三三 |
| | 一九三四 | 三 | 三 | 三一、六〇〇 | 一 | 二三五、三三〇 | 二六六、九三〇 |
| | 一九三五 | 三 | 三 | 三一、八〇〇 | 一 | 二四八、二六四 | 二八〇、〇六四 |
| 南 西 ア フ リ カ | 一九三六 | 五 | 五 | 三一、〇四九 | 一 | 三二八、四六七 | 三五九、五一六 |
| | 一九三一 | 五 | 三 | 二、二〇五 | 七 | 一〇四、七四九 | 一〇六、九六一 |
| | 一九三一 | 二 | 三 | 二、六五〇 | 一 | 二二〇、六六〇 | 一一三、三二〇 |
| | 一九三二 | 二 | 三 | 二、七二五 | 一 | 二二二、三五〇 | 一二五、〇八五 |
| | 一九三三 | 二 | 三 | 二、七二五 | 一 | 二二二、九九〇 | 一二五、七七五 |
| | 一九三四 | 二 | 三 | 二、八三〇 | 一 | 二二三、七二〇 | 一二六、五六〇 |
| ス ワ チ ラ ン ド | 一九三五 | 二 | 三 | 二、八八五 | 一 | 二二四、四六〇 | 一二七、三五五 |

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

| 国名 | 年 | 人口 | 増減 | 出生率 | 死亡率 | 自然増減率 | 出生率 | 死亡率 | 自然増減率 | |
|------------|-------|------|----|---------|-----------|-----------|-----|-----|-----------|---------|
| タンガニカ | 一九三六 | 五 | 五 | 二、七三五 | 二 | 一四三、二七八 | — | — | 一四六、〇一五 | |
| | 一九三一 | 四 | 二六 | 八、二二八 | 三三、五八四 | 五、〇二二、八四八 | — | — | 五、〇六三、六六〇 | |
| | 一九三二 | 二 | 三三 | 八、二一七 | 三三、六八七 | 五、〇二二、六四〇 | — | — | 五、〇六三、五四四 | |
| | 一九三三 | 二 | 三一 | 八、一五一 | 三一、四七七 | 四、九三三、一七九 | — | — | 四、九七二、八〇七 | |
| | 一九三四 | 二 | 三一 | 八、三〇四 | 三〇、一二六 | 五、〇〇〇、一六〇 | — | — | 五、〇三八、五九〇 | |
| | 一九三五 | 二 | 三一 | 八、一九三 | 二九、六四〇 | 四、九五〇、五〇五 | — | — | 四、九八八、三三八 | |
| | 一九三一 | 四 | 二六 | 八、四五五 | 三三、四四七 | 五、〇九六、一七八 | — | — | 五、一三八、〇八〇 | |
| | 一九三一 | 四 | 二六 | 四三 | — | 二九三、六七一 | — | — | 二九三、七一四 | |
| | 一九三一 | — | — | 五八八 | 五八 | 七四九、一五二 | — | — | 七四九、七九八 | |
| | 一九三二 | — | — | 五八五 | 七二 | 七五〇、九九五 | — | — | 七五一、六五二 | |
| トーゴランド(佛委) | 一九三三 | — | — | 四四八 | 六三 | 七五三、三〇〇 | — | — | 七五三、八一 | |
| | 一九三四 | — | — | 四一八 | 五五 | 七六一、一五六 | — | — | 七六一、六二九 | |
| | 一九三五 | — | — | 四一八 | 五五 | 七六一、一五六 | — | — | 七六一、六二九 | |
| | 一九三一 | 三 | 二二 | 一七五、七六四 | 二、二三四、九二八 | 七六二、九四七 | — | — | 七六三、四二〇 | |
| | 一九三一 | 五 | 二八 | 二、〇〇一 | — | — | — | — | 二、四一〇、六九二 | |
| ウガンダ | 一九三二 | 二 | 三一 | 一、八一 | 一四、〇六一 | 三、五六八、八八六 | — | — | 三、五五三、五三四 | |
| | 一九三三 | 二 | 三一 | 一、八五四 | 一四、二〇四 | 三、六〇四、一三五 | — | — | 三、五八四、七五八 | |
| | 一九三四 | 二 | 三一 | 一、九五九 | 一五、〇八六 | 三、六二二、五九一 | — | — | 三、六二〇、一九三 | |
| | 一九三五 | 二 | 三一 | 一、九九四 | 一四、八六〇 | 三、六四四、二四五 | — | — | 三、六四〇、六三六 | |
| | 一九三一 | 三 | 二八 | 二七八 | 三七、五二三 | 一九七、六三七 | — | — | 三、六六一、〇九九 | |
| | 北アメリカ | 一九二九 | 一〇 | — | 二八、六四〇 | 四七九 | 一三六 | — | — | 二三五、四二八 |
| | | 一九三〇 | 一〇 | — | 四一三 | — | — | — | — | — |
| | | 一九三四 | — | — | 三三四 | — | — | — | — | — |
| | | 一九三二 | 七 | — | 四、三二一 | — | — | — | — | — |
| | | 一九三一 | 七 | — | — | — | — | — | — | — |
| 中央アメリカ | 一九二一 | 四 | 二四 | 九一四 | 一八 | 二八、八三五 | — | — | 二九、七六七 | |
| | 一九二一 | 四 | 二四 | 一〇、七四八 | — | 一四六、〇二六 | — | — | 一五六、七七四 | |
| | 一九二一 | 四 | 二四 | — | — | — | — | — | — | |

| | | | | | | |
|---|------|---|----|-----------|---------|-----------|
| ベ ル ム ダ | 一九三二 | 五 | 一七 | 二二、七〇六 | 一六、四六七 | 二九、一七三 |
| | 一九三一 | 二 | 三一 | 一二、四六二 | 一六、六七四 | 二九、一三六 |
| | 一九三三 | 二 | 三一 | 一二、七五六 | 一七、〇六三 | 二九、八一九 |
| | 一九三四 | 二 | 三一 | 一二、八九四 | 一七、四四五 | 三〇、三三九 |
| | 一九三五 | 二 | 三一 | 一三、一六七 | 一七、八六一 | 三一、〇二八 |
| カ イ マ ン 諸 島 | 一九二二 | 四 | 二五 | 一、九九四 | 一八、一八二 | 三一、一九〇 |
| | 一九三四 | 八 | 七 | 二、三六八 | 三、二五九 | 五、二五三 |
| ド ミ ニ カ | 一九二二 | 四 | 二四 | 五五六 | 三六、三六二 | 六、〇〇九 |
| グ レ ナ ダ | 一九二二 | 四 | 二四 | 八一四 | 六二、七九六 | 一四一 |
| ジ ヤ マ イ カ | 一九二二 | 四 | 二五 | 一四、四七六 | 八一七、六四三 | 三、六九三 |
| | 一九二二 | 四 | 二四 | 一一二 | 一一、〇〇八 | 八五八、一一八 |
| モ ン ト セ ラ ー ト | 一九三二 | 二 | 三一 | 一一一 | 一一、七七九 | 一一、二二〇 |
| | 一九三三 | 二 | 三一 | 一一〇 | 一一、七九九 | 一一、八八〇 |
| | 一九三四 | 二 | 三一 | 一一〇 | 一一、九五九 | 一一、〇六二 |
| | 一九三五 | 二 | 三一 | 一一〇 | 一一、〇五六 | 一一、一六一 |
| パ ナ マ 運 河 地 帯 | 一九三〇 | 四 | 一 | 一〇七 | 一一、一五七 | 一一、二六四 |
| ペ ル ト リ コ | 一九三〇 | 四 | 一 | 一八、八一四 | 二〇、三八五 | 三九、四六七 |
| サ ン キ ツ、 ヌ ヴ イ ス | 一九二二 | 四 | 一 | 一、二四六、七一九 | 三九七、一五六 | 一、五四三、九一三 |
| サ ン ヴ ア ン サ ン | 一九三二 | 四 | 二四 | 一一、二二九 | 三六、九五九 | 三八、二一四 |
| ト リ ニ ダ ツ ト・ ト バ | 一九三二 | 四 | 二六 | 二、一七三 | 四四、五四九 | 四七、九六一 |
| タ ー ク ス、 カ イ コ ス 諸 島 | 一九二二 | 四 | 二五 | 四一、一一八 | 二二七、五一六 | 四二二、七八三 |
| | 一九三二 | 二 | 三一 | 二二〇 | 五、四〇二 | 五、六一二 |
| | 一九三四 | 二 | 三一 | 一六〇 | 五、一四〇 | 五、三〇〇 |
| ヴ ア ー ジ ン 諸 島 (英) | 一九二二 | 四 | 二五 | 三六 | 五、〇四六 | 五、〇八二 |
| | 一九三二 | 二 | 三一 | 二二 | 五、一八七 | 五、二〇九 |
| ヴ ア ー ジ ン 諸 島 (米) | 一九三〇 | 四 | 一 | 二二、〇一〇 | 一九、九六二 | 二二、〇二二 |
| 南 ア メ リ カ | 一九三一 | 四 | 二六 | 二、一二七 | 一六六、六一五 | 八、七〇〇 |
| | 一九三一 | 二 | 三一 | 二、〇八五 | 一六七、八八三 | 八、七二三 |

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

| 地域 | 年 | 月 | 日 | 白人 | アジア人 | 雑種 | 土民 | 其他不明 | 總計 |
|----------|------|----|----|---------|-----------|---------|---------|------|-----------|
| パレスタイン | 一九三三 | 六 | 三〇 | 二〇九、二〇七 | | 八九五、六七七 | | | 一、一〇四、八八四 |
| | 一九三四 | 六 | 三〇 | 二五三、七〇〇 | | 九一七、四五八 | | | 一、一七一、一五八 |
| | 一九三四 | 一 | 三一 | 二八二、九七〇 | | 九二七、五八四 | | | 一、二一〇、五五四 |
| | 一九三五 | 一 | 三一 | 三五五、一四二 | | 九五二、九七二 | | | 一、三〇八、一一四 |
| | 一九三六 | 一 | 三一 | 三八四、〇四五 | | 九八二、六五九 | | | 一、三六六、七〇四 |
| 海峽植民地 | 一九三一 | 四 | 一 | 一〇、〇〇三 | 一、一〇三、八〇五 | | 七 | | 一、一四、〇一五 |
| チモール | 一九三一 | 四 | 一 | 六二五 | 四七三、五八六 | | 一五二 | | 四七四、三六三 |
| マレー非聯邦 | 一九三二 | 四 | 一 | 一、二九五 | 一、五二五、〇五五 | | 三 | | 一、五二六、六〇四 |
| D ヨーロッパ | 一九三一 | 四 | 二六 | 一七、四九四 | | 五七 | 六二 | | 一七、六一三 |
| E オセアニア | 一九三〇 | 四 | 一 | 二二七 | 一一 | 八七七 | 八九二六 | 一四 | 一〇、〇五五 |
| 米領サモア | 一九三一 | 四 | 一 | 四七八 | 一七二 | | 九三、四一五 | 一 | 九四、〇六六 |
| 英領ソロモン諸島 | 一九三〇 | 一〇 | 一 | 七一 | 一九、八六〇 | | 四九、六九五 | | 六九、六二六 |
| | 一九三一 | 一〇 | 一 | 八一 | 二二、九〇八 | | 五〇、〇三八 | | 七三、〇七二 |
| | 一九三二 | 一〇 | 一 | 八二 | 二五、七八二 | | 五〇、〇四五 | | 七五、九〇九 |
| | 一九三三 | 一〇 | 一 | 八二 | 二八、三〇六 | | 五〇、〇六九 | | 七八、四五七 |
| | 一九三三 | 一〇 | 一 | 八三 | 三〇、六八七 | | 五〇、一一四 | | 八〇、八八四 |
| | 一九三三 | 一〇 | 一 | 八七 | 三二、二三〇 | | 四九、九三五 | | 八二、二五二 |
| | 一九三四 | 一〇 | 一 | 八六 | 三五、三四五 | | 五〇、一七四 | | 八五、六〇五 |
| | 一九三四 | 一〇 | 一 | 八三 | 四〇、二三二 | | 五〇、三三六 | | 九〇、六五一 |
| | 一九三五 | 一〇 | 一 | 八一 | 四七、四二八 | | 五一、〇五六 | | 九八、五六五 |
| | 一九三五 | 一〇 | 一 | 七七 | 五一、六二一 | | 五〇、五四〇 | | 一〇二、三三八 |
| カロリン諸島等 | 一九二一 | 四 | 二四 | 三、八七八 | 六一、六三〇 | 二、七八一 | 八六、七一〇 | | 一五七、二六六 |
| | 一九三一 | 一 | 三一 | 五、〇五八 | 七八、一六三 | 三、四四六 | 九五、八二一 | | 一八五、五七三 |
| | 一九三二 | 一 | 三一 | 四、八六三 | 八〇、四三五 | 三、五四八 | 九七、四三三 | | 一八九、三九八 |
| | 一九三三 | 一 | 三一 | 四、八〇四 | 八二、四六七 | 三、六六一 | 九九、一七七 | | 一九三、二三八 |
| フィジー諸島 | 一九三四 | 一 | 三一 | 四、七六三 | 八四、七七五 | 三、七一七 | 一〇〇、九七七 | | 一九七、四四九 |

佛領植民地

| | | | | | | | |
|------|-----|--------|---------|--------|---------|-------|---------|
| 一九三五 | 一二三 | 四、九三八 | 八七、三七八 | 三、八四六 | 一〇二、五一四 | 三、三七六 | 二〇二、〇五二 |
| 一九三六 | 四二六 | 四、〇二八 | 八六、八二一 | 四、五七四 | 九九、二六七 | 三、六八九 | 一九八、三七九 |
| 一九三一 | 七一 | 五、八八二 | 四、四三三 | 四、四三三 | 二八、三二四 | 一、〇八四 | 三九、七二三 |
| 一九三一 | | 二四九 | 七二八 | 二三一 | 三三、一六四 | 一 | 三三、三七二 |
| 一九三一 | 六三〇 | 二七五 | 四三九 | 二三五 | 三三、四五八 | 九 | 三三、四一六 |
| 一九三二 | 六三〇 | 二五一 | 三九八 | 一 | 三三、〇三六 | 一 | 三三、六八五 |
| 一九三三 | 二二 | 二四四 | 三九六 | 一 | 三三、四四五 | 一 | 三三、〇八五 |
| 一九三四 | 二二 | 二三八 | 三六〇 | 一 | 三三、七三九 | 一 | 三三、三三七 |
| 一九三五 | 二二 | 二八〇 | 五三六 | 一 | 三三、九九三 | 一 | 三三、八〇九 |
| 一九三〇 | 四一 | 一、二〇五 | 八六五 | 一 | 一六、四〇二 | 三七 | 一八、五〇九 |
| 一九三〇 | 四一 | 七三、七〇二 | 一三六、三三三 | 二八、二三四 | 二二、六三六 | 七、四五一 | 三六八、三三六 |
| 一九三一 | 六三〇 | 七一、四四二 | 二四三、七〇三 | 三〇、〇〇三 | 二二、三九一 | 七、六七二 | 三七五、二一一 |
| 一九三一 | 二二 | 七二、四〇四 | 二四四、六四八 | 三〇、七五九 | 二二、三一〇 | 七、七三八 | 三七七、八五九 |
| 一九三二 | 六三〇 | 七三、三六五 | 二四五、五九二 | 三一、五一五 | 二二、二三〇 | 七、八〇五 | 三八〇、五〇七 |
| 一九三四 | 六三〇 | 七六、三九一 | 二三八、三五二 | 三四、四一九 | 二二、七九六 | 七、九九一 | 三七八、九四八 |
| 一九三五 | 六三〇 | 八一、〇七五 | 二三七、五七二 | 三五、九七八 | 二二、七一〇 | 八、一二二 | 三八四、四七七 |
| 一九三六 | 六三〇 | 八八、一九三 | 二三七、六一三 | 三七、六〇八 | 二二、五九四 | 八、二六九 | 三九三、二七七 |
| 一九三一 | 四一 | 一四七 | 一、一〇五 | 一 | 一、四二六 | 一四 | 二、六九二 |
| 一九三二 | 四一 | 一四一 | 六九六 | 一 | 一、四七五 | 四 | 二、三一六 |
| 一九三三 | 六三〇 | 一六五 | 九三六 | 一 | 一、五二七 | 一三 | 二、六四一 |
| 一九三四 | 四一 | 一六三 | 九三三 | 一 | 一、五六七 | 一四 | 二、六七七 |
| 一九三五 | 四一 | 一五八 | 九三一 | 一 | 一、六〇三 | 四 | 二、六九六 |
| 一九三六 | 四一 | 一七九 | 一、〇九二 | 一 | 一、六四七 | 四 | 二、九三二 |
| 一九三一 | 七一 | 一五、八四八 | 一二、六三一 | 一 | 二八、五〇二 | 一八四 | 五七、一〇五 |
| 一九三六 | 七一 | 一六、五一五 | 七、九三〇 | 一 | 二八、八〇〇 | 一 | 五三、二四五 |

ギルバート、エリス諸島

| | | | | | | | |
|------|-----|--------|---------|--------|--------|-------|---------|
| 一九三三 | 六三〇 | 二五一 | 三九八 | 一 | 三三、〇三六 | 一 | 三三、六八五 |
| 一九三三 | 二二 | 二四四 | 三九六 | 一 | 三三、四四五 | 一 | 三三、〇八五 |
| 一九三四 | 二二 | 二三八 | 三六〇 | 一 | 三三、七三九 | 一 | 三三、三三七 |
| 一九三五 | 二二 | 二八〇 | 五三六 | 一 | 三三、九九三 | 一 | 三三、八〇九 |
| 一九三〇 | 四一 | 一、二〇五 | 八六五 | 一 | 一六、四〇二 | 三七 | 一八、五〇九 |
| 一九三〇 | 四一 | 七三、七〇二 | 一三六、三三三 | 二八、二三四 | 二二、六三六 | 七、四五一 | 三六八、三三六 |
| 一九三一 | 六三〇 | 七一、四四二 | 二四三、七〇三 | 三〇、〇〇三 | 二二、三九一 | 七、六七二 | 三七五、二一一 |
| 一九三一 | 二二 | 七二、四〇四 | 二四四、六四八 | 三〇、七五九 | 二二、三一〇 | 七、七三八 | 三七七、八五九 |
| 一九三二 | 六三〇 | 七三、三六五 | 二四五、五九二 | 三一、五一五 | 二二、二三〇 | 七、八〇五 | 三八〇、五〇七 |
| 一九三四 | 六三〇 | 七六、三九一 | 二三八、三五二 | 三四、四一九 | 二二、七九六 | 七、九九一 | 三七八、九四八 |
| 一九三五 | 六三〇 | 八一、〇七五 | 二三七、五七二 | 三五、九七八 | 二二、七一〇 | 八、一二二 | 三八四、四七七 |
| 一九三六 | 六三〇 | 八八、一九三 | 二三七、六一三 | 三七、六〇八 | 二二、五九四 | 八、二六九 | 三九三、二七七 |

ハワイ

| | | | | | | | |
|------|-----|--------|---------|--------|--------|-------|---------|
| 一九三一 | 二二 | 七二、四〇四 | 二四四、六四八 | 三〇、七五九 | 二二、三一〇 | 七、七三八 | 三七七、八五九 |
| 一九三二 | 六三〇 | 七三、三六五 | 二四五、五九二 | 三一、五一五 | 二二、二三〇 | 七、八〇五 | 三八〇、五〇七 |
| 一九三四 | 六三〇 | 七六、三九一 | 二三八、三五二 | 三四、四一九 | 二二、七九六 | 七、九九一 | 三七八、九四八 |
| 一九三五 | 六三〇 | 八一、〇七五 | 二三七、五七二 | 三五、九七八 | 二二、七一〇 | 八、一二二 | 三八四、四七七 |
| 一九三六 | 六三〇 | 八八、一九三 | 二三七、六一三 | 三七、六〇八 | 二二、五九四 | 八、二六九 | 三九三、二七七 |

ナウル

| | | | | | | | |
|------|-----|-----|-------|---|-------|----|-------|
| 一九三一 | 四一 | 一四七 | 一、一〇五 | 一 | 一、四二六 | 一四 | 二、六九二 |
| 一九三二 | 四一 | 一四一 | 六九六 | 一 | 一、四七五 | 四 | 二、三一六 |
| 一九三三 | 六三〇 | 一六五 | 九三六 | 一 | 一、五二七 | 一三 | 二、六四一 |
| 一九三四 | 四一 | 一六三 | 九三三 | 一 | 一、五六七 | 一四 | 二、六七七 |
| 一九三五 | 四一 | 一五八 | 九三一 | 一 | 一、六〇三 | 四 | 二、六九六 |
| 一九三六 | 四一 | 一七九 | 一、〇九二 | 一 | 一、六四七 | 四 | 二、九三二 |

ニューカレドニア

| | | | | | | | |
|------|----|--------|--------|---|--------|-----|--------|
| 一九三一 | 七一 | 一五、八四八 | 一二、六三一 | 一 | 二八、五〇二 | 一八四 | 五七、一〇五 |
| 一九三六 | 七一 | 一六、五一五 | 七、九三〇 | 一 | 二八、八〇〇 | 一 | 五三、二四五 |

ニューギニア

| | | | | | | | |
|------|-----|-------|-------|-----|----|-----|-----|
| 一九三三 | 六三〇 | 三、一九一 | 一、六〇二 | 一九五 | 六九 | 二一四 | 一七九 |
| 一九三一 | | 一、〇八三 | 三、四五一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一九三二 | | 一、〇六八 | 一、九二五 | 一 | 一 | 一 | 一 |

| | | | | | | | | | |
|----------|------|-------|-------|---|---|---|---|---|-------|
| ニューヘブライズ | 一九三三 | 一、〇一九 | 一、二九九 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| | 一九三四 | 九七九 | 一、三三二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| | 一九三五 | 九五三 | 九四九 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| ノーフォーク | 一九二一 | 四 | 七一三 | 一 | 四 | 一 | 一 | 一 | 七一七 |
| | 一九三三 | 六三〇 | 一、一三〇 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| バブア | 一九二一 | 四 | 一、三四三 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三三 | 六三〇 | 一、一四八 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| トケロー諸島 | 一九二六 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三一 | 四二七 | 四八二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三三 | 四二七 | 四二二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三三 | 四二七 | 四二二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三三 | 四二七 | 四〇九 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三四 | 四二七 | 三七八 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三五 | 四二七 | 四三九 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| トロンガ | 一九三三 | 四二七 | 四〇九 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三三 | 四二七 | 三七八 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三四 | 四二七 | 四三九 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |
| | 一九三五 | 四二七 | 四三九 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一、三三二 |

この點に關し印度法令委員會報告は白人とユーラシア人の地位に關し優れた摘要を與へてゐる。

白人に關しては「英國の結合が繼續し深く根を下してゐるにも拘らず個人としての英國人は數年印度で働いた後、眞の自分の故郷である國へ隱退しようと思ふでゐる滞在者のみである。たゞ商用又は業務で出かけたもの小分部のみが印度に永く居住するのである。そして歐洲人の社會は成長しない。」

ユーラシア人に關しては「この社會は印度の國を發達させ、秩序を維持することに名譽ある役割を演じた。然し一般的に云へばそれは貧弱な社會である。印度に居住し、印度を故郷としなければならぬのに印度化の進行の結果とした大部分どつちつかずのものになる危険にさらされてゐるのである。」と報告書は書いてゐる。(Report of Indian Statutory Commission. Vol.

L. P. 42, 46.)

熱帯の風土的條件と移民適格性の諸問題

同じ事實は蘭領ジャバ、英領マレーに於ける白人とユーラシア人についても言はれるのである。

英領マレーに於ては一七、七六八人の英國人が一九三一年に於て總人口の〇・四%を構成してゐるに過ぎないがユーラシア人は更に少い。和蘭に關して、一九三〇年の國勢調査によれば蘭領印度は六〇、七二七、二三三人を有するがそのうち二四〇、四一七人が白人に過ぎないのである。

グリフィス・タイラーは白人について其の將來の植民可能地を計算してゐるのであるが、これは我々にとつても参考になるであらう。(Greenh T ayl or : Environment, Race and migration. P. 415.)

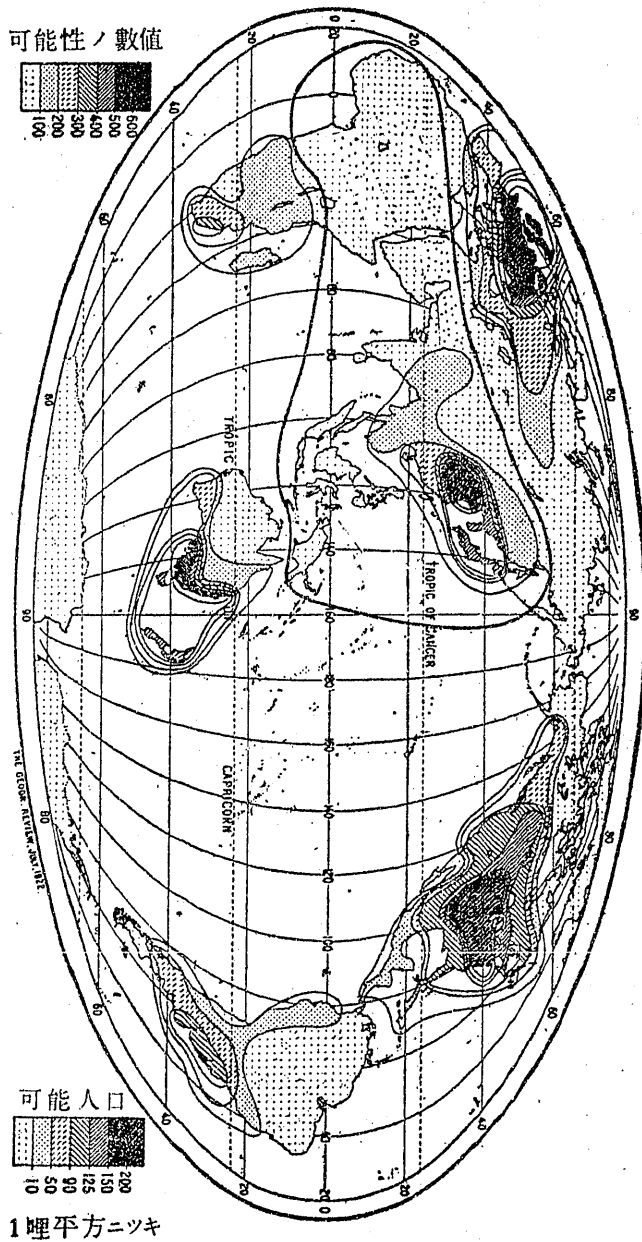
彼は世界を七十四の經濟地域に分割し、その總ての地域に付き四の優力な規定物(溫度、降雨、土地の高度、石炭保有量)によつてそれをグラフに示した。そして四角形のグラフーエコノグラフ Ecognograph が各地域のそれらの要素に對應して描れる。このグラフの地域は略々其の土地の居住

適應性を表示してゐるのであつて、同價の居住適應性の線 is-oiketes を世界地圖の上に引いた。

同じ尺度に従ひ居住を決定する主要要素の變化をも含めて描いたこれらのエコノグラフの地帯は略々その地帯の居住適應性を示してゐると考へられる。

世界地圖にこれらの地帯を示す數値を點示すると同數値を結んだ線が一種の輪廓圖を形成する。

かゝる線にギリシヤ語の居住性を意味する oiketes からとつた is-oiketes の名稱が與へられてゐる。



世界各地の經濟價值に従つた將來白人居住地の分布。太い黒線内の地域は白人居住に適さないが、こゝでは一様に取扱つた。この圖に示された分布の事實は居住最適度を1,000とし(左圖)居住等値線又は對應する可能人口密度(右圖)によつて示された居住適應度によつて表現されてゐる。

上述の記述によつて知り得る如くそれは白人を中心にして考へたエコノグラフである。従つてそこには氣温關係が最大の價值を與へられてゐる。人種的に熱に耐へ得る我々日本人のエコノグラフはこれと形が違はなければならぬ。

殊に我々にとつて重要な問題はタイラーの—右の圖に見られる如く—白人に適應せずとして除いた地域が現在日本の形成しようとしてつゝある大東亞共榮圏と一致すると云ふことである。そこに我々は大東亞共榮圏確立に對する信念と世界文明に對する寄與とを見出すことが出来る。